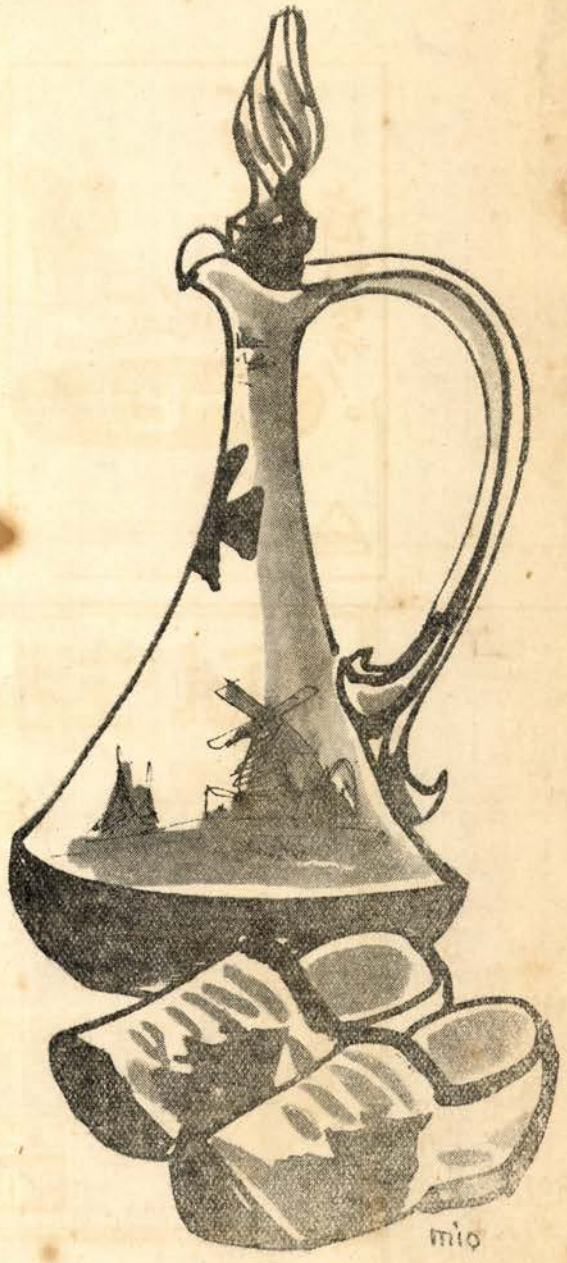
川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.348



五月號

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿二年五月一日發行第十一卷第五號（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通巻三百四十八号

五月号目次

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介
窓口談義……麻生路郎…(三)
余韻ある大阪ことばを生かせ……品川陣居…(四)
直原湖月さんを訪ねて……丸尾潮花…(三)
新川柳鑑賞……麻生路郎…(一四)
幸福を幸福に……戸田古方…(一六)
源頼政……富士野鞍馬…(一四)
野郎どもと女たち……東野大八…(一一)
受売りばなし……不二田一三夫(二七)
久良伎先生遺補……前田雀郎…(一二)
青ペン赤ペン……(二一)
飛燕往来……(二三)
社の黒板……(二五)

★

不朽洞句帖……麻生路郎…(三)
川柳塔……麻生路郎選…(六)
同舟近詠……諸家…(一四)
近作柳欄……麻生路郎選・北川春巣選…(一六)
一路集「肩」……山根白星…(二六)
「洗濯機」……森下愛論…(二八)
金泥集……麻生葭乃選…(一五)
各地柳壇……(二九)
川柳第二教室
作句指導……戸田古方…(二六)
不朽洞会から……(二四)
柳界展望……(二三)
公私雑記……(三四)

全五十巻 学生教養新書
日本図書館協会選定図書

麻生路郎著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—
二五〇円 送三二円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、及びその作り方と味い方を柳壇の第一人者が五十余年間の実作者としての尊い経験を生かして最も平易にわかり易く説かれた斯道最適の案内書。

取次 川柳雑誌社

至文堂
東京都新宿区払方町

本社五月句會

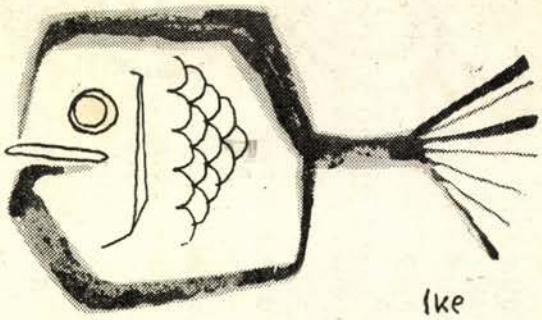
五月の風は青葉の匂い
五月の鉛筆は歓びのリズムです
柳友を誘い合せてゼヒ御参加下さい

日時 五月七日(月)午後六時
場所 光明寺
大阪市天王寺区下寺町二丁目市バス停前
(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

兼題 「警官」(二句) 麻生路郎選
「アルサロ」(三句) 清水白柳子選
「方針」(三句) 後藤梅志選
席題 三題(当日発表)
柳話 麻生路郎
同 北川春巣
呈賞 ★各題天位 ★路郎選天位に不朽洞賞
会費 五拾円
幹事 紫香・淡舟・賀峯・いさむ・雄声・堰子・白水・水堂・愛論・一三夫

—注意—
本社の句会は毎月七日を定例日といたします

川柳雑誌社句會部



窓口談義

むかし、東京の下宿に某という支那人がいた。ところがこの支那人は冷や飯がきらいだった。下宿のヒロインに、「ワタシ、寒むいめしキライ」と云った。

これでどうにか通じることは通じたがホントの日本語ではなかった。

葭乃の通っていた女学校の体操の先生にギレスピーという外人がいた。体操の時間に、「皆さん、羽織、はいてはいけません」と云われた。

靴や下駄なら、はくというが、羽織ははくとは云わない。しかし、これもどうにか通じることは通じて、羽織を被ている学生は羽織を脱いだ。日本語はなか〳〵むずかしい。

同じ学校の校長のトリストラムさんは日本に五十年も来ていられたが、日本語は至って下手クソであった。食卓についた時に、「コレ食らいませんか」と云われた。汝コレを食らわんかと聖書にあるので、ぐらうという語を上品な言葉だと思っていられたのであろう、平然としてこの語を用いられた。

私たちの英語も、向うへ行ったらこの調子であることは云うまでもあるまい。イヤそれ以上かも知れない。

しかし、コレはその人が持つ語彙の尠ないことを物語っているものである。通じることは通じてもピンと来ないか、滑稽な感じを対手方に与えるに過ぎない。ところが、川柳の初心者にも、句を構成する語彙がすくないために、右に挙げた例ほどに甚しくはないとしても、これに類した表現をして、折角のテーマを充分発揮させることの出来ない場合が往々にしてあるのである。

川柳はどうにか意味が通じさえすればいいというものではない。意味が通じるものであると同時に、芸術的作品でなければならないのである。そのためには表現する文字がズバリと適切であること、句外に余韻を放つことを条件とするのである。

よく〳〵考うべしである。

不朽洞句帖

麻生路郎

随筆をかいてるそうな停年後

さびしがる人となりなや葉桜へ

老人がとぼけて生きる手を覚え

政治家で売れず仲人して暮らし

梨里結婚

大安へ父も賛成しとくなり

妻が撮り夫が撮るも新婚の

余韻ある大阪ことばを生かせ

品川陣居

「大阪言葉」の味わい――という虚子の息女の星野立子（たつこ）さんの文章が目についたので少々引用させてもらう。

――昔、近松や西鶴ものなどが、大阪の市井や遊里を中心としたことであり、大阪らしい人情風俗、また大阪言葉であるということのために、なめらかに運びなめらかに響く。たとえば「天の網島」や「曾根崎心中」を東京の役者がすると、それがたとえ大阪言葉を使ってもアクセントがだめで、何かぎごちなく、ぶちこわしになる。関東言葉の荒くれた調子では現わし得ない柔軟な、まわりくどいような、たわいないような、それでいて底の方に強いところがあるような、またそれでいて人情がからんでいる、上方文明が生んだ一種独得な言葉が耳になめらかに流れ入り心をとらえる。

遠く近松や西鶴を引き出すまでもなく大阪言葉の味わいというものは江戸ッ子にないものがある。アチャコ、千栄子コンビのものに限らず大阪で作られたラジオの劇のようなものは、何か大阪でなければ生れ出て来ない、ある人情的な面白いものがあるように思われる。

余談になるが近ごろの映画には大阪言葉を使うことが多くなったように思う。私は観なかったが「夫婦善哉」という映画は大阪を舞台として大阪言葉で終始しているという。「たよりにしてまっせ」とかいう言葉がその後流行しているとか。それに限らず近ごろは東京地方でも大阪言葉がよく使われているように思う。これは社会的に見てどういう傾向であろうか。

よいとか悪いとかは別として、――と、バカにどうも東京語の大阪言葉が東京言葉にない一種の効果をもって流行するということは面白いことである。

ある人が先日こんなことを言った。大阪言葉は東京言葉よりも種類が多い。人間の感情を現わす言葉が細かい、というのである。たとえば「しんどい」「えげつない」「ややこしい」とかいうのは、「ああくたびれた」というよりも複雑なキメの細かさを感じる。「ややこしい」ということはこのごろ東京でも自然に使われはじめたが、もとは上方言葉で、これを「複雑な」といい代えて見ても、ややこしいという言葉のもたらす意味とは違いものになる。「えげつない」という上方言葉を「いやらしい」とでもいってみても、その意味はもっと複雑で余韻がある。

旗色がわるいが、ぼくは、それでは川柳作品（大阪方の）ではどうであろうか、と本誌の〃川柳塔〃（二・三月）に目を通してみると、驚いたことに大阪言葉ないし上方ことばを句語にした作品が夥いのである。

主宰の二月号の巻頭に

名が売れただけで淋しいこと、ないか

淡々と一句にまとめられたこの一句は座五（下五）の「ことないか」と柔かく表現されたところ、なるほど、と前説をうべなえるものがある。ちょっと、どうも関東語ではこうはいかぬと感心される。フッと溜息のようにもらされた主宰の、おさびしいような顔が見えるようだ。

これは、〃川柳塔〃のではないが葭乃女史が経験作家の良い作品としていられる

雪かいな、もう呑む腹で休む腹　沒食子

税務署にだれぞ知り合いないかいな　沒食子

団体だつかと女中立つたまゝ　好郎

あきまへんやろかと借金気が弱し　淡舟

命まで賭けた女でこれかいな　梅里

のごとき、いよいよますます星野説が肯綮に当ってくる。

ことに好郎さんの「団体だつかと女中立ったまゝ」のごとき、今日のお客はんは団体やと帳場できかされて、がっかりしたその女中さんの面差しが見えるようである。団体客からはとくべつのチップは入らないし、総体のお勘定の一割ぐらいを家中の女中さんに分配されるのだから、アベックのお客や粋人のお客が気を使ってくれるようにはいかないのである。これは旅館でもいゝし、お茶屋さんでもよかろう。とにかく巧いものである。東京言葉ではちょっと、これだけの含みは出せまい（東京方の川柳家に叱られるかナ）。

それから梅里さんの「命まで賭けた女で。これかいな」――の「て」一字がバカに利いている。これなど、この助詞というより、たった一字ですべてを説明している。しかも「これかいな」と柔かくうけているところこわい（恐ろし

い）ようである。葭乃女史のお好きな句だけあって当然かもしれぬが――。

ところで東京方にも由来、とくに東京人――少し前の東京人、昭和生れでない大正生れぐらいの東京人の川柳には、特色のある作品があったものだ。

故孤軒先生の長男で、いま東京柳橋花街を中心に「料理新聞」の主幹をしている三宅巨郎さんの作品には、ちょっと他の東京柳人のマネのできない句風があって異色だった――じゃあない現在もそうだが――たとえば

双肌もズボンもゆるせ鮎料理　巨郎

特別に女房笑つて歯がはいり　同上

鮎のシュンに、とくに鮎料理を表看板にしている川添いの料理屋、夏座敷だから戸、障子はとっぱらってあって涼しい座敷だが、それでも暑いので双肌（もろはだ）ぬぎになって、しかも長いズボンも暑苦しいので、それもとって、おそらく真白いうすいステテコぐらいになってビールを傾けている、双肌もズボンもゆるせ――といってそのお行儀の悪さもカバアしている、いかにも東京人らしいザックバランな風態がよく表現されている。席につらなる芸者も明石やスキヤのキモノの袖をくわえて鮎の骨をスッと抜く手練のあざやかさも目に見えるようである。

次の「特別に女房笑って歯がはいり」も巧い！新しく入れた歯で、きのうまでのくちもととちがって、くちつきが何かふっくらとして若返って見える。にっこり笑った笑い顔も、何か特別に見えるというのである。あるいは「おい歯が入ったンでバカに若く見えるぜ、ちょっと笑ってみなヨ」「ソオ、フフフフ」といった情景である。

笊屋味噌漉しのように赤帽やつてくる　○丸

これは東京にその人ありと知られた西念寺和尚西島○丸（れいがん）師の作句である。ちょっとこの句説明しないとわかるまいが、大正期の物売りの呼び声にへざーるやー、みそこしーといって、その大小の笊や小さな味噌漉し笊を車いっぱいに、両横も後ろの方まで盛れあがるように釣るしたり積んだりして売り歩いたもので、その格好が、ちょうど駅の赤帽が旅客の荷物を両手いっぱい、肩までつるして、旅客の出入する改札口でなく、別の広い口から出て、停っている列車の方へやってくるというので――それを作者が見て笊屋味噌漉しのようだとフッと感じたのであるが、いかにも東京人の眼にしい確かさがあって面白いのである。

東京方のじまんも少し、しておいて、さて――である。

本誌の〃川柳塔〃の各作家の作品を見ていて（ごく少数の大阪言葉ないし上方ことばを句語につかったものを除いて）これが大阪で出ている雑誌にのっている句だから大半上方人の句だと知れるがこれが東京の柳誌にのっていれば（よしや作者の地名が名の上にのっていてわかるとしても）関東か関西か色分けはできないのである。何も地方々々で作品が変るものでもないし、変らなくても差しつかえないようなものだが、いわゆる標準語というヤツをそう有難がる必要はないとおもう。関西の作家はどしどし上方ことばで、作ったらいゝのにとぼくなどはおもうのである。

〃川柳塔〃の中から上方ことばの作品をぬいてみると――

死にやはつた人を済まない例にする　水客

楽屋騒然うちの帯揚どこえいた　潮花

べんちやらやないでと念を押してほめ　日満

蚊のかんだ跡まで探し嫉いてくれ　生々庵

好きな事しときなはれと妻ひらけ　竹荘

惚れさせる術（て）もありまつせとは金か　一飄

ボーナスを貰うたら御出でやすやと妓　十悟

二、三月の〃川柳塔〃で、このほか二、三句あるきりである。いかにも少いのである。

おべんちやら――とは東京でもいうが、この句ほど善意のものでなく「お」の字を一字つけて、上役にひっこするいやな奴のことをいうのであるが、「蚊のかんだ」は東京では「蚊の食った」というが、ぼくの母方の祖母は、大阪順慶町生れだったので、子供の時から、この「蚊のかんだ」は、よくきかされていた。ぼくの母は三州岡崎在の生れだから、祖母の「蚊のかんだ」を大ゲサだと笑ったが、考えてみれば「蚊の食った」という方が大ゲサかもしれない。相手を「死ぬほど好き」ということも東京ではいうが、これも極端な方では横綱だろう。もっとも「死ぬ〳〵」はバレ語で有名だが……。「ボーナスを貰うたら御出でやすや」のような時、東京では「おアシがあったらまたおいで」といって、いかにも薄情なアバズレ女の放言めくのである。「金の切れ目が縁の切れ目」で、いかにも薄情にきこえるのである。

だが、東京の古いことばに「折れ口」（おれくち）というのがある。

路でモーニングの友達や知人に逢ったとき、

――どちらへお出かけで、

――ちょっと折れ口がありまして……

ということは、主に葬式――告別式がえりなどにいうことで、こうした人前ではばかることを隠し、ことばをいうのである。

面白いとおもったのは、いつか八十翁関口文象（ぶんぞう）さんに、ある会で出席を待ちかねて、さいそくする電話をかけると、奥さんが「ちょっと日本橋までまいっておりますが……」といわれるので変におもったが、側の苦労人の島田天涯子（てんがいし）さんが、「便所なんだヨ」と教えて笑っていたが、そうは言えないので、どこかデタラメな所を言うのも古い東京のしきたりである。鎌倉でもいゝのだが、それでは遠すぎるから……もっとも文象さんのお住いは小石川（文京区）だから日本橋でも近くはないが……。

関東というと「べらんめえ」が通りことばになっていて、プロ階級の専用語とされているが、それと同義語に「べらぼうめ」というのがあるが、この方は、ちょっと言い方が粋（いき）で、「べらぼうめ、そんなことってあるか」というふうに、純粋の、東京人の鉄火（てっか）な面を出したことば、ぼくなどは好きである。何でもかでも「べらんめえ」ではないのである。ニュウアンスがちがうのである。

川柳の濫觴が江戸――関東ではあっても、上方――関西の人が、何も標準語の王座をとった関東コトバ類似のコトバを遵奉すること

（27頁へつづく）

川柳塔

大阪市　中島生々庵

横槍も予定に入れて名議長
不渡りを信ぜぬ程に信じ切り

豊中市　戸田古方

無抵抗主義と満悦してみても
小心ときまゝと批判されながら
人類に奉仕しますと美辞麗句
御領主の恋には蔦がまといつき
背の高さぐらいに見合ためらわせ
鼻眼鏡ボケツにしもてからきめ手

ホノル、市　内藤草一郎

母性愛どころかいつかヒスの愛
親の財摺って世間と云うを知り
欲しいなあボクサーの如き面の皮

東京都　宮田不二

悪友よたまには飲みに来るもよし
紙芝居の悲劇を好くも女の子

大阪市　正本水客

宿直の朝からスキー担いで出
取巻きに甘んじ雨を従いてゆく
かんと煮き脊中の風は気にならず
日本髪弁当などは提げさせず
菜の花のなかを無茶苦茶あるきたし
鎧戸を洩れる光りも春のもの
出刃庖丁らしくボタ〳〵水が垂れ

大阪市　丸尾潮花

口説かれる脊広きちんと正座して
名を呼べばあいと答えてくれそうな
人間の弱さが損なくじも引き

大阪市　北川春巣

疎開から内裏の鼻は欠けたまゝ
電熱を煽ぎたい程あわてゝい
ロマンスグレイ小説のような恋もなく

奈良市　尾崎方正

酒蔵できゝ酒吐くを惜しく見る
生き残る方の不幸はふせて置き
病気まで仲よくするな兄弟

大阪市　武部香林

政治論で勝ち註文をとりそこね
大物の動きへ記者のノイローゼ

大阪市　福田妄夢

秒針が死ぬぞ死ぬぞときざんでる
動物園いつもと違うお父ちゃん
借金のない猿の夫婦を見て帰り

出雲市　尼緑之助

人生の流転女泣きもせず
次男就職
初便り要するところ無事にいる
耕運機市になる田圃で音を立て

大阪市　水谷竹荘

誰れにでもすぐに惚れると叱られる
煉炭を起こす世帯は貧しそう
二次会へ行かぬ気わざと酔ひつぶれ
月賦まだすまぬに月賦でまだ買う気
パトロンになれる身分をうらやまれ
お産の退院
宝物の様に赤ちゃん抱いていに

広島市　国弘半休

老妻の超勤サロンパスを貼り
殉職の子が父の職継ぎに来る
颯爽とポスター程に滑られず
始末書にはっきり個性抜けていず
初耳のそれから零号若かく見え
電灯のかさも拭いてる嬉しい日

兵庫県　小西無鬼

あの分も香典になってしもうた死
鳥取浅津温泉に遊ぶ
一ト握り雪が喰べたい旅の汽車
山の脊と汽車の煙の一文字
お一日信仰試す様に降り

尼崎市　小林文月

嫁が来てから菜の味かわって来

大阪市　富岡淡舟

世話人やさかいに呉れた花名刺
自家用にどっかと脱税考える
答弁は調査しますと言うただけ
奈良県　飯降白香

会うたびに病気になってる友がいて
するさと弱さがつい公金をごまかした
防府市　長野井蛙

気を使うなと言いつゝ贈答辞退せず
捨てられた過去あり平気で男替え
青畳ほめて女房に睨らまれる
新居移転
今日からは我が家寝て見つ起きて見つ
布施市　森下愛論

甚六に生れてお経など習い
大阪市　松江梅里

寄附すれば通じますとはうまい洒落
ロマンスグレー若い第二の母が来る
岡山県　直原七面山

三千円のペンでも金釘流になり
お役所にいて役人を軽べつし
女細やか羽織の紐の柄までも
パヽマヽをどなりつけてる一人っ子
株がどうのと此の頃の女
大阪市　西森花村

チョコレート祖母は気味悪そうに受け
当る人もあるのか住宅皆這入り
端数迄税務署恐い顔で取り

尾があれば振って見せたい立候補
あんまりの人出賽銭あげなんだ
今も尚薔薇匂えり遺作展
春じゃもの年でないぞえ忘れ物
鳥取市　河村日満

当確であろと実弾射っておき
大山へさらば〳〵と旅の人
大山をバックに二三枚頼み
伯耆富士宿屋の二階からも撮り
眼に注射誰れか医学を信ぜざる
ストライキ明治に近きわが思想
せめてもの贅ハイヤーで娘を送る
岡山県　福島鉄児

親の眼にこれが売れない娘に見えず
へそくりへ足してもらって鶏を飼い
酒量では息子に勝てぬ歳になり
イヤリング位と親を譲歩させ
岡山県　横部牛歩

三面の隅で小さく家出死に
手が鳴っている萩の間は酒が切れ
云い負けて出れば月迄霞んどり
敗残の姿名所の花が散り
カンニングしてまでテスト滑って来
希望まだ捨てずせっせとプレゼント
往診のお医者の方がたんと咳き
岡山県　服部十九平

うるさ型圧えるためのイロハ順

友引を寺は暦に朱で印し
年度末欺項目にない支出
尼崎市　長谷川三司

六十の抵抗加美の素をつけ
六十の浮気はトルコ風呂に馴れ
贅沢は人間ドックから電話
兵庫県　若林草右

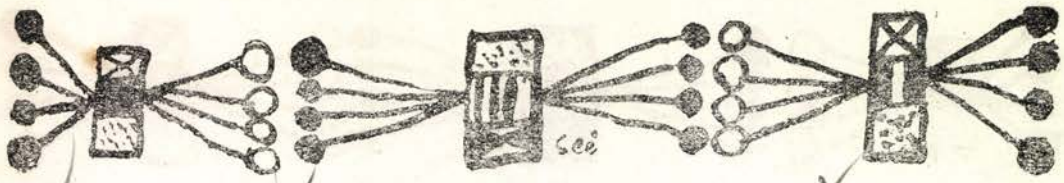
逢引へラッシュの靴を磨かせる
見るだけのデパートにして世帯じみ
怨みごと半分もいえぬ借電話
大阪市　足立春雄

クワエ煙草勝ってるらしい将棋盤
小説を読めば読んだで子を案じ
紀元節たとえ嘘でもあって良し
熊本県　有働芳仙

質屋から出て逢引の顔となり
逃避行態々歩くとこがあり
手術中雀の囀り丈け聞え
高知県　大西迷窓

ぐっすりと寝て又明日を暴れる気
廊下又子が走ってる休診日
パパ機嫌机の下のかくれんぼ
借金に追はれることを知って呑み
下関市　石川倔流洞

行商人趣味のことから荷をひろげ
給料だけ渡せば足りる亭主です
大阪市　安岡珊枝郎



又閣へやる気かと男真面目也
匙投げた子に母の眼は諦めず　広島県　山田季賛

停年は近し子供に職はなし
アベックへ遠慮なく降る春の雪　大阪市　山本葉光

新婚の宿直気の毒がられ過ぎ　倉敷市　木村千容

オッチョコチョイ晴耕雨読の夢があり
花咲かぬ木あり実らぬ花もあり
春の旅毛糸のチョッキ忘れたり
つくしんぼ貴公子型におどけ型
清濁併呑豪語していて引張られ
謹厳居士のあだ名があって肩が凝り　石川県　那谷光郎

子の顔が浮んで旅に玩具買う
遅刻した足へ廊下のよくきしみ
知り初めた恋は芝生の丘に佇ち
下駄箱の花にも保険屋世辞をまき　大阪市　木村水堂

狂人に刃物のような多数決
スト無事に済んで労資の花見酒
せめてもの驕り三等寝台車
長屋の子出世しそうな顔でなし
反対をするのが義務の野党席
くた〳〵で婦唱夫随が戻って来　堺市　八木摩天郎

二代目は芸者もまじる野辺送り
晴耕雨読などと女房に養われ
不渡りをみつめていればにえつまり
落選の上に子供は落第し　倉敷市　相原一善

姫鏡女の部屋にしてくれた　岡山県　田村藤波

薬局でいたわられとる不眠症
利廻りより男に惚れた資本金
鼻くそと云いたいけれど貰うとく
生甲斐を見付けて鍬が軽うなり　岡山県　岡田夜潮

共学で意中を明かす勇気出来
驚きへつんぼ遅れて眼を見はり
飲む話ばかりは右派も左派も無し
春が来た海苔やかんびょうやかまぼこへ
継母が敬語使えば尚こわし
気楽さは贋造紙幣も廻わり来ず
店開きおかけなさいと蜜柑箱
容赦なく隣と同じ店開き　大阪市　稲葉鳩花

パーティーをさけたテラスへ春の月
街角でへの字になって影が折れ　岡山県　本田恵二朗

音なしの構え小猫はもうおぼえ
中古品磨けば磨くほどにはげ　大阪市　真鍋一瓢

君たちがあっての僕と老獪な
売れないで雨の宿かりばかり佇つ
ぢゃあ僕も云うがと敵意あらわなり
度外れて金使うたに逃げられた
花の色は移りにけりな子を抱いて
妻も僕も無趣味でしてと子沢山
工員に小金が出来て胃潰瘍

発熱十日

どの見舞よりも父ちゃんしんどいの　高槻市　松川杜的

初対面の江戸っ子弁にどぎまぎし
民生委の眼に羅漢の立派過ぎ
退職金十坪の家を建てました　鳥取市　森本法泉子

うちの子も落書をする年になり
新聞が補筆したよな遺族の辞
欠勤にきちんと仕事残ってい　大阪市　佐野白水

中学三年ぼち〳〵親が顔を出し
中入のように一日ストを止め　大阪市　後藤梅志

到来の酒包装のまゝで呑み
可愛がり過ぎると他所の子を見てる
友達の良さを演壇からも述べ
本棚が淋しい貸した二三冊　倉敷市　松村万古

就職を迷わす口が二つ出来

工事中そこへ飲食店が出来
逆ろうて呉れるものもなく水静か
病院がはやり停留場が出来
邪教か知らんがバスの客が増え
冷静な方が借金返えさぬ気
金で済むから会長受諾する
御援助の賜物ですをもう忘れ
質問へ答弁へ名を売りたがり
花見酒下戸は土筆を摘みに行き

倉敷市　藤井春日

掻き分けて席占めたのが掏られとり
汽関車のような吐息の子沢山
ざらに居る妓なのに課長対次長
百姓の跡取オートバイに凝り
ノイローゼ閉めた金庫を又覗き

岡山市　津田麦太楼

大津絵が出るとお女将に渡す三味
ヒレ酒にして加茂鶴のコクが抜け
着こなしもニコヨンらしゅう板につき
こちとらはやっと羽田を見て戻り

米子市　小西雄々

性格の弱さを叱る相談欄
保険屋になった恩師の脊が丸し
昇給は確実らしい印鑑みがく
愛し合う程に不安がつのる恋

吹田市　橋本幸男

永平寺七百余年の艶を出し
純潔を無くしてからの女老け
キッスして見れば女にリードされ

堺市　高崎雄声

言われてからするのはいやとアプレの子
さて家が出来たら次は名誉職

大阪市　吾郷玲人

大丈夫かいなと酒の数を読み
スクーター買うて幹事にされました
宴席の漫才別なネタでくる
今日の入りどうじゃと芦屋から電話

岡山県　岡田青果

お寺様同志肉屋でまた出逢い
美しい妻を残して死に切れず
美食家のこんな汚い台所
左派県議食い逃げをした過去を持ち
食う米がないのに犬も猫も飼い

西宮市　若本多久志

御近所はどうであろうと製材所
刑務所の庭にも桜ちらほらと
押えられた家定紋の鬼瓦
冬オーバー未だ着てるのは俺一人
なびくでもなく拒むでもない女

島根県　藤井明朗

花の土手無粋な防火宣伝車
子役者の鞄も入れた旅廻り

岡山県　永松東岸子

水仙の冷たさもある未亡人
新築をして公務員疑われ
婦人会もやっぱりボスのいるらしく

倉敷市　野田素身郎

花便り貯金の残額たしかめる
俺は年とっただけなのに世は変り
怒っても給仕じゃ誰もとりあわず

倉敷市　安原斜木

見飽てる花も酒さえあれば別
女工馴れ男に負けぬ口となり
嫁ぐ娘へもう予算など云うとれず
淋しさは行幸の記事の小さすぎ
母恋し叱る立場となった母

吹田市　菊田いさむ

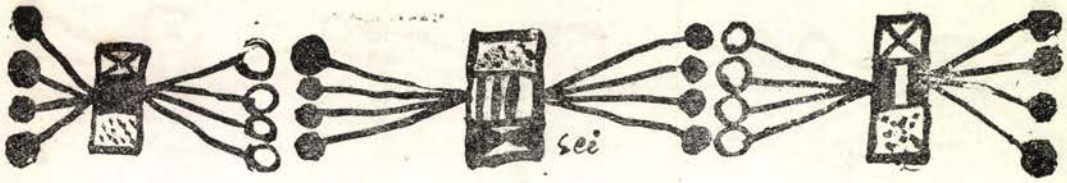
手の荒れを気にせず妻になりきって
外米も値下げするほど人気落ち

大阪市　神谷凡九郎

お互の立場立場の声になり
握る手を抜けるウナギに教えられ
御自分は待たされるのが一つち嫌
乳母日傘独善主義な子に育て
家庭欄女は話す事多く
合槌を打って処生の椅子守る

大阪市　清水望峰

出戻りがなる程顔も赤らめず
俺怠期別宅欲しいなと思い
ひばり鳴け〳〵オーバ重たし



監査今日事務所の空気集うせる

二号とは淋し名とりにまでなって　倉敷市　水谷谷水
へゞれけによばれ些か照れ臭し
明るい子だったが後妻きて変り
第二夫人だとは出世をしたものさ
できたのかマスターすこし若返えり　大阪市　木村十悟
税金はもう恐がらぬほどさびれ
避姙して心細さを感じる日
誘えたのんよと喋ってみたくなり
立売りの声につられる閑な足　大阪市　不二田一三夫
妻揚子吐き出すように捨られる
関脇へ横綱頭下げて立ち
音痴だが美空ひばりに瓜二つ
アラ素通りですかと月給狙われる　兵庫県　酒井ひか平
ロマンスグレーふくみ笑いの嬉しそう
急病へ選りに選っての暴風雨
此の青空へ善い事一つしときたし
お人好し眼鏡を落しそうな鼻
後一合明日になさいと隠される
軽喪をしても金持ちには勝てず
色っぽい話で医者が元気付け
ほうきいなばおとぎの国の山は雪　倉敷市　長尾越鳥
日曜日雨か風かの日が多く

巡査の柔道鼻で笑って通りすぎ　神戸市　野村初市
出張の留守をねらって喋りに来
女専出て住み込み女中とは悲し
こけし皆目鼻の位置がチト変り
再会の市場どっちも葱をさげ
二児連れて赤いマフラがまだ似合い　大阪市　金井文秋
味をやるわいと綺麗な詐欺に逢い
辞表出す気力も失せて平社員
子の頭言わず学校ばかり選り
遊廓で途中下車した顔もせず
恩給を頼り停年店を出し　岡山県　戸田喜楽
娘の見合母も白髪を染めて待ち
終電へ酔うた同志のウマが合い　岡山県　池田古心
殿で出ても学歴物を云い
愛情を探る転寝とも知らず　東京都　石居高志
三月をオ、雑草は忘れてず
出来過ぎて居て何かしらつき合えず
団体の今日は徹夜ときめて乗り
やりくりに長けて良妻など言われ
夫婦喧嘩結論として嫉いて居り　岡山県　坂手有子
二人きり話そうなどと若返えり
高齢の死へ賑やかな台所

新家庭むやみやたらに人形いる　大阪市　早川清生
小選挙区これなら俺もとも思い
再婚しまた貞節の道をゆく
こともあろうに子供を一人置き忘れ
駅余寒佇つ影どれも鞄持ち
夜が明けて鴉また飛ぶほかはなし
病院の横でも医院食ってゆけ
社員見る部長女婿を選ぶ眼で
ペンネームの方がたくさん税払い
師の門を辞せば北風吹いており　大阪市　武部若菜
養ってもらう代りの孫を負い
モデル地区中途で予算足りません
ガレージに威圧をうけたあほらしさ　小松市　伊藤茶仏
反抗期顔を歪めることに馴れ
勘弁をしとくなはれと値切らせず
今着いた貨車を雀は見逃さず　失名
一応は頼母しそうなボディ・ビル
二号おく分迄稼ぐ顔の艶

○

失名氏の句稿を三ヶ月前の分まで調べたがどうにも判らなかった。筆蹟鑑定というものは難しいものである。次号で発表したいので至急御知らせ下さい。尚二枚以上の句箋はとじておいてほしい。（係）

人間横丁 (37)

野郎ごもと女たち

東野大八

どういう風の吹き回しか、私というイトむつけき男に、ミス何々詮衡会の審査員という肩書が舞込んだ、とんでもない、と大いに尻ごみしたが、社の主催でもありしてとうとう引受けねばならない破目になった。うちの女房は、あきれるし、友達連中は、君がねえ、としげしげと私の顔を眺め入ったりしたものだ。

当日、念入りに散髪をして背広も一装用にきかえ、白いおゝいのかゝった審査員席の端っこに収った。地元のオレキレキで坐ってみると私が一番若い。

「海水着でやるんですか」とさるメーカーの重役氏がきく。いゝえ寒いからそのまゝです、との係員の返事に「つまんないの」と別の中年紳士がぼそりといって笑わせる。打見たところロマンスグレイの自負にもえる御年輩の紳士ばかり、私を加えて約十人であるが、こんなことをいうのでは、先が案じられた。

やがて開始。しずしずと一人の美女が登場した。一人が法廷の判事よろしく、まず人体訊問である。名は、齢は、処は、職業は、これが終るとセリフの朗読があって、二、三の自由質問の後、起上って傍のイスの回りを歩いて終りである。ナンバーワン嬢は、顔は山田五十鈴型だが、身体は万才のみやこ蝶々である。どことなし角がとれてゝ、その眼つきたるやまことに色っぽい。隣りの紳士は容貌の項に九五点とつけた。どうやらその流し目にイカれたらしい。

二番目はそらまめみたいなくりくりした顔が現れた。新制中学の二年生で、田舎のバスガールが服を着かえて出てきたようだ。三番目は、うむ、と息をのむほど体軀隆々としたのが現れた。女プロレスだね、というさゝやきがもれた。残念ながらすごい肉体派だが、そのお顔がアチャコそっくりである。しかし後姿を存分にみせて容姿を拝見すると、ヒップまさに一メートル五〇はありそうだ。それがプルンプルンと壮大にゆれていくのである。うむ、と感じやすいお隣りがうなったと思うと、容姿の項に一〇〇と書いた、第四番目は…お次五番は……とこうして次々に若い御婦人方が、きびすを接して現れては消えていった。結局一等はすぐさま定ったが、二等三等が採点同率で決選となった。

終って審査員一同にコーヒが出たが、その席上で

「こうみると美人は少いね。よくぞまあ、この御面相で——というのがいたね」「色っぽいと思ったら、一番目の御婦人、今夜お遊びに……と帰りしなにマッチをくれたよ、バーの女なんだよ、ありゃ」「審査員がお金持が多いとみて宣伝にきたのやろうか」「いずれにせよ、これで安心したよ、応募の淑女諸君よりうちのカアちゃんの方がやっぱり美人だったちゅうこと」とわやわやがやがやさ。

さて終って外へ出ると、私は友人と待合せたさる茶房にと赴いた。

片隅で友人とあい話も一段落ついてふと、気づくと後で数人の女たちが、声高に話合っている声が自然に耳にとびこんできた。

「なんなのあの真ん中の男ったら……おれは天下の色男なんていう顔してゝ、丸っきりエンタツじゃないの」「貴方は愛情をどう考えてますか、だって、あのツラで—こちらが逆にうかゞいたいくらいだわ」「あゝあの顔で、あの面でだわ、鼻の下はそも何センチなの?」「要するに、あゝいう年ごろの男わね、審査という厳粛な事実に名をかりて、私たちのお尻を凝視し鑑賞しあるモウ想をたのしんでんのさ」「どうせ、海水着をきせてやるんだった、てなこと考えてたんだろうよ。ヤロウどもは……」

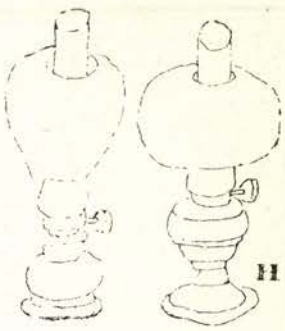
私は、尾てい骨から後頭部にかけ一陣に風が瞬間的な速さでかけ上るのをおぼえた。

「さあ出よう」

友人はそんな私にお構いなく起上ったが、いやいましばらく、と私は顔を真正面にむけたまゝ、緊張した顔付でこういったが、金りんざい二度とこんな催しには出てやらないぞとカタク心にちかったことだった。

どうせ落選した女アチャコなどが一ときのウサ晴しの話だろうが私は昨今のミス何々ばやりには、もともと大反対の一人である。容姿、容貌がいゝというたゞそのこと一つで、彼女らの人生が、それまでのものと全く別なものになるということは納得のいかない話である。それは犬の品評会と全く同じことである。毛並や手入れが美しいということだけで、高価な品格やら価値が発生し、幸福な生活が約束されるということは、平等であるべき人間世界を愚かに遍在させることである。表より中味第一の人間がもっともっと掘り出されてその実質を発揮する世間にしない限り、人間世界はいつもイビツになってまっとうな心のよりどころが得られないのではないか、更に現下の世相は……友人と別れて独り街を歩きながら私はこの様な同じ問題ばかりを、らちもなく頭にくり返しながら街を歩いた。そしてそんなところに出て、大まじめに相手を観察し、厳しゅくに採点している自分の姿を思い返し幾度か顔が熱くなり、そのたびに道の小石を手荒くけとばしてみたりした。

川柳雑誌社特製
投句用 柳箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料八円



久良伎先生傳補遺

前田雀郎

（中）

私はさきに手前勘から、久良伎先生の「日本新聞」入社の時を明治二十九年であろうとしたが、この推定はほゞ当っていたかのようである。というのは前記先生の「師長を以て居らず」という子規との交友を綴った文章の中に「余の先生を知るや、実に明治廿八年にあり」云々のあと、つゞけて「後ち、報知社より転じて日本新聞社に入るや」の文字を見ることが出来るからである。しかしこれのみではそこに明治二十九年という年を確かにする何ものをも窺い得ぬ。ところが更らに文章を読みすゝめて行くと「三十年の二月、余世の大家と称する旧派歌人十余家に就き、其自讃歌各十首を乞い、これを日本紙上に連載す」とあって、そのことから図らずも子規の怒りを買い、彼をして憤余かの有名な短歌革新運動の狼火ともいうべき「歌よみに与ふる書」十篇を「日本新聞」に書かしむるにいたった顚末が記されてあるので、二十九年入社のことはここに動かぬものとなるのである。

古嶋一雄の回想記は、前にも記したようにこの時久良伎先生が「自ら川柳の師匠と称し」「入社して来たことになっているが、果して先生にこの如き言行があっただろうか。私は右「師長を以て居らず」の一文の中に明らかにされている当時の先生の消息に見てこれを疑うのである。即ち先生は「日本新聞」入社後の、子規との交渉に就き次の如く記している。

「時に先生（子規のこと）尚日本新聞文芸欄の監督たり、当時与謝野鉄幹朝鮮に在り、屢々其作品を寄す、余一日先生に問うて曰く、鉄幹の詩如何。先生笑って曰く、鉄幹の才華煥発、洵に当る可からざる者あり、但其官妓臭きに堪へずと。後、鉄幹、宮崎湖処子、佐々木信綱、大町桂月、杉鳥山の諸氏と新詩会を興し、上野公園三宜亭に新体詩研究会を開く。先生亦招に応じ病を力めてこれに赴く。余偶々先生に伴ふ。戯れに先生の袂を曳き一狂句を示す。先生苦笑直ちに筆を執り「木の下に新体天狗集いけり」と改め、曰く如斯して稍句体を獲るに近しと、其諧謔坐談の中、尚後進を導くを忘れざること此の如し」

当時子規はその病勢いよ〳〵進み、「日本新聞」への出社も不可能となって根岸の私宅に引籠っていたが、なお文芸欄監督として紙面作製の指揮を執っていたので、部員であった久良伎先生は編輯上の用件をも兼ね、以前にも増して子規庵に出入りすることゝなった。こうして先生もまた子規の影響を受け、彼とも〳〵短歌への関心を強めたらしく、ついに前記の如く当時世間的に名を知られた旧派の（ということは後に子規等の新短歌から振返っての謂いで、当時はいうまでもなくこれを正統として疑わなかったのである）歌人達の作品を、担当の紙面に自らの案をもってして掲載するほどの熱心をこれに見せるにいたったのである。こういう当時の先生の中に、関心事として川柳があったかどうかは、最早考えるまでもない。先生自ら右の文中に「戯れに先生の袂を曳き一狂句を示す」と記していることによって、既に解答済みである。もし先生にして早く川柳に志すところあったとしたら、後年口にするも穢らわしとまでその名を忌んだ「狂句」の文字をこゝに使う筈はない。当時の先生にはまだ狂句も川柳も一つものでしかなかったと見るべきで、以ってその理解の程度も窺われよう。しかも先生はこれを「戯れに」と云い、なお我が作に子規の添削を得て、その種作品の詠みぶりに就て教えられるところ尠くなかったことを感謝している。その態度は川柳に対する門外の人のそれを一歩も出てはいないのである。

古嶋一雄によれば先生は川柳欄担当者として入社したかの如くであるが、明治二十九年頃の「日本新聞」の川柳欄は、これも同翁の回想記に従えば西芳菲山人か、或いはその後の足立半顔居士なる人が担当していた筈で、こゝに先ず翁の記述に於ける記憶の混乱が見られる。しかしそれはそれとして先生の同紙川柳欄担当の年代を明らかにするため、しばらく翁の回想記により「日本新聞」に於ける川柳欄担当者の交代のあとを振り返って見ると、「日本新聞はその創刊の当初より時の政府に対する「光栄ある敵」の立場をとり、常に痛烈なる批評をこれに贈っていた為め、しば〳〵発行停止を食った。これではいかに闘志あるも経済的に参らざるを得ぬので「その予防といった訳で、直接に時事を批評せず、なんとか間接的にやる方法はないかと考えた末」同翁の思いつきで、当時入社匆々の子規をして諷刺的な時事俳句なるものを試みさせた。しかしその作品は辛辣味に於て同翁の思うところに遠かったので、一年程にして廃め、それに代るに川柳を以ってすることゝなり、芳菲山人西松二郎氏を得

てこれに当らしむることゝなった。諸般の事情から推して子規の時事俳句は明治二十六年を以って止み、翌二十七年から八年へかけてこの芳菲山人の川柳が紙面に現われるようになったものゝ如くに思われる。ところが西は理学士として教鞭を執る身であったから、定時その作品を新聞に提供することは不可能だったので、毎日これをなし得る人をというので、当時横浜から発行されていた「圓圓珍聞」という諷刺雑誌に狂句を掲げていた足立半顔という人を起用してその人に代らしめた。恐らくこれが明治二十九年頃になるのではないかと思う。こうして「日本新聞」の川柳欄は一応安定したものゝ、この人は全然政治というものが判らなかったので、古嶋翁を失望せしめることはなはだしかった。そこで同翁は子規と相談の上、子規の推挙する「藤井紫影という金沢の高等学校の先生をしておる人に」改めてその事を頼むことになったが、交通及び通信機関の発達せぬ当時にあっては、かゝる遠隔の地からの寄稿は、その作品に時間的ズレの生じるのはまぬかれなかったから、この人も暫くにして廃め、「後には阪井久良伎君にも頼んだりした」という順序のようである。

右に藤井紫影とあるのは後の文学博士藤井乙男氏のことで、藤井博士が金沢の四高に教授として赴任したのは明治三十一年であるから、同氏が柳壇を担当したのはそれ以後と見なければならず、前に掲げた柳壇担当者の順序に間違いないとすれば久良伎先生の同欄担当は更らにそれにおくれる訳で、「日本新聞」入社後そこに何年かのへだたりがあり、先生が決してそのことによって同社に迎えられたものではなかったことが知れよう。そういう先生に対し、古嶋翁の「川柳の師匠」云々「江戸川柳の流れを汲む」云々は、前にも触れたように、先生が川柳に志を得てから後の言行に影響された同翁の記憶の錯倒であることというまでもない。

事実、「師長を以て居らず」に記された「日本新聞」入社前後に於ける先生御自身の文学的な行動を見ると「後屢々其門に出入し、歌学を論じ時流を罵る。先生一々余が頑蒙を啓く。余これより太だ文学者を賤めず、一日久米幹文の「水屋集」を携へて先生に示す。一々其瑕瑾を指摘し、其長短を論ず、余大に獲る所あり」とあって、短歌に対する関心の育ちをのみ語り、其間たま〳〵前掲「戯れに先生の袂を曳き一狂句を示す」の一挿話を残すことはあっても、それ以外川柳の如きは、その「せ」の字にだに触れるところはない。現行の先生伝が当時既に先生の胸中川柳革新の志の萌芽を見たかの如くしているのに対し、その実際はこの如くはなはだ遠いのである。

たゞこゝに注意すべきは、先生が旧派歌人の作品を紙上に掲げて子規の怒りを買った際、子規より「学術の上に私交無し、意見の反する所あらば同志討ちも亦避くる所に非ず、乞ふ一快戦を試みん」との書に接し、先生のこれに答えた文章の中に「余もと別に任ずる所あり、歌学上の見の如きは実は空漠云ふに足る者無し」の文字あることである。歌学上の見云々は暫く措いて、その前にある「別に任ずる所あり」のこの「別に」は何を意味するのか。これに興味を覚えるのである。即ちこの時先生の脳裡に、自らの志すべきものとして、短歌以外の何ものかゞ一瞬影を落したに違いない。文章の「余もと別に」の「もと」はこの場合単なる言葉の綾に過ぎぬものであったろう。何かゞこの時閃きに似てかすめ去ったものと思われる。その何かは果して何であったろうか。

それはいずれとして、先生はこうして子規の前に素直に兜を脱ぎ、その希望するところにまかせて「日本新聞」紙上に、明治三十一年二月十二日より「歌よみに与ふる書」を引つゞき十回掲載することゝなるのであるが、しかし先生はこれによって私に別に我がたどるべき道を思い描きながらも、子規との接近は却って以前に倍するものを見せて行った。

（つゞく）

附記　生来の難筆に加え、原稿がはなはだおくれたので、前号の拙稿は工場及び編集部に大分迷惑をかけたらしく、誤植が尠くなかった。本来は私の罪としてそのまゝにすべきであるが、一字の相違のため意味をまったく別なものとするおそれのある箇所も見えるので、そこだけ次の如く訂正させて頂く。四頁三段八行目「入社もして」は「入社として」同四段二十四行目から五行目への「関心事は知識」は「関心とその知識」同五段十八行「これにて」は「これには」五頁四段最後より二行目の「明治二十二年は明治三十二年」の誤り。

川雑案内

八ポ活字十三字詰六行・金二百円（前金）
切手代用可・改選・修繕・整巾・句曽袋
内・柳誌・駒書・選其他

★　大阪市内への御用件は一件に就て一〇〇円交通費不要・品物は一件三貫匁位二尺立方以内・大阪市西成区北吉田町二〇　ひまわり社
電話　天下茶屋　五五三番

★　大阪で一番古い回覧雑誌社です。新刊ベストセラー（新書版）の回覧もします。御希望の方には詳細お知らせします。　妄夢経営のひまわり社へ　電話　天下茶屋　五五三番

★　川雑・婦人友の会の会員を募る・会長麻生葭乃女史・作品は「川柳雑誌」の金泥集に掲載されます。会費年額百二十円希望者は川柳雑誌内婦人友の会係宛

★　川柳雑誌社支部新設を希望される方は規則書を請求されたい支部に適当な指導者のない場合の御相談にも応じます。社内支部新設係宛に申込まれたし。

★　月刊川柳文芸五月十五日に創刊・購読料月五十円（〒共）百円以上前納下さい。新潟市白山浦一丁目二四二　川柳文芸社　電話　新潟（2）八五九四・下村梵

★　ヴァイオリン講習希望の方は枚岡絃楽教室（枚岡市河内町六三六）へ・講師は元宝塚歌劇団・関西交響楽団の奏者麻生アート氏　A級千二百円　B級八百円週二回

同舟近詠

松山市　前田伍健

結局は党略党利と読み流し
果物屋丸丸丸と積み重ね
放射能あゝ春風も春雨も
ひまな昼座ったまゝで体操し
幾万年向き合ったまゝ岩と岩

大阪市　橋本緑雨

二階から見るアベックの楽しそう
八頭身男押される気味なり
おしぼりで首まで拭いて何んにしよ

須坂市　高峰柳児

履歴書を出して予感を働かせ
名論につられ煖炉が消えかゝり
飲めるのを役人取柄にされて居る

和歌山市　秋月宏方

夜の女越えてはならぬ線もなく
小さい町どちら向いても山が見え
一と晩で月給飲んだ過去もあり
月曜日昨日遊んで来た疲れ
故郷まだ文化に遠いはねつるべ
おぢいさんまだ気は若いベレー帽

大阪市　石田沐天

げんしゅくな事実へ女史も只の人
またもとの夫婦となって家裁を出
赤線地帯女の姿いつわらず
同郷の刑事に代り白となり

今治市　長野文庫

その中で動いてるのは写真班
二等車へ急きも慌てもせぬ歩み
客が来てラジオ勝負を聞かず切り
流行歌には特別な暗記力

大洲市　米沢暁明

天才と嘗て言われてトロを押し
子沢山我れ機関車に甘んじる
秀才も酒の燗には馴れていず
正しさは認めてくれる世と諭し

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔二六四〕

世相険し上役の死を待つも　（杜的）

部長が病気をする。年が年だし、ひよっとしたら、ひよっとされるかも知れない。若しそうだったら、自分に部長の椅子が廻って来るかも知れないと思うと、少しも早く亡くなって呉れたらと、云う怖ろしい考えが、又してもアタマをかすめてゆくのである。そんな考えがよくないことは云うまでもないが、こんな考えが浮ぶというのも世相がきびしいからであると自分で自分をかぼう人間の弱点をついた句である。

〔二六五〕

もげそうな釘へ電話帳をかけ　（梅志）

都会の電話帳は型も大きいし、ページ数も多いので、かなりの重量がある。それが、すぐとれそうな一本の釘に吊されている風景のスケッチである。

誰もが、イヤというほど見せつけられている風景を拾いあげるか、拾いあげないかは作家の眼に外ならない。上五の「もげそうな」という方言がこの句を生かしている。「もげる」は「ちぎれる」の意である。

〔二六六〕

お百姓さんにたまわる広い天　（太郎丸）

常にビルの谷間にうごめいている人間が、たま〳〵郊外に出た時に、ああ、ひろ〳〵とした天、あを〳〵とした天、果てしなき天、平和を表徴する天、これこそ百姓にたまわった天恵であると、つく〳〵思われたのである。これは都会人にとって一つの発見に違いない。

〔二六七〕

人間になったと思や薬壜　（〇丸）

働らき抜いて、地位も出来、少しは金も出来てヤレ〳〵と思う途端に、病魔に襲われたのである。それが人の世の現実で誰もが同じような道を辿るものだと悟ってしまえばそれまでであるが、悟りきれないところに人間のなやみは尽きないのである。

〔二六八〕

旗本社員今日も社用でない社用　（伊知邑）

出勤する。出勤簿にはんこを捺す。それから自分にあてがわれた仕事をする。そのうちに社規による八時間が経過する。そこで静に退出する。本来会社勤めはそれの繰返えしでいい筈のものであるが、それだけでは多くの場合、いいポストにはつけない。大ていの会社には形に影の添うように重役に対する旗本社員というのが存在する。彼等はすんで重役の私用を果して保身の術としているので、それ

金泥集

課題「舞合」　麻生葭乃選

袖にいて舞台の芸より客を見る　阿茶
舞台裏弟子の大名立って待ち　同
暗転の舞台十年流れさせ　きさ子
たそがれる舞台へ鐘をならす役　同
早よ行けば良いのに舞台で「おおそうじや」
舞台では儲りそうもないそばや　千永
討入りの舞台太鼓が強う鳴り　同
舞台から探した君は隅に居り　百合子
期待した舞台がセリフ云わぬ役　文子
お母さんと舞台を話すほどきもの　花鶴美
美智ちゃんと舞台へかかる声もよし　徳子
置舞台勝手の違う足拍子　奈良子
初舞台朝から母は落着かず　千代美
芸道へ生命をかけて晴舞台　明子
舞姿見分けのつかぬ人となり　初穂
舞台中継へさんざめく針仕事　満寿子
舞台のクライマックスへ父は居眠り　若菜
初舞台足の震えを意識する　湖月
釘の音喧しやっと舞台出来　清子
学芸会舞台へ続く鬼退治　都詩子
舞台馴れして玄人の域に入り　たつよ
独唱の舞台へひびくアンコール　梅林
雫弟子の舞台師匠の眼がうるみ　美舟
舞台裏楽屋雀のかしましく　有子
放送の舞台へテレビ欲しくなり　貴洲
キンチャンの舞台はキャアキャアで春伸びなし　年子
母の目は涙舞台の子がかすみ　三枝
アンコールの拍手どんちょう又上り　美智子
暗転の舞台おはやし派手に鳴り　一栄
初舞台妻の涙の中で舞い　ひさみ
かぶり付舞台の埃吸うて居り　花代子
フイナーレ舞台は春の花吹雪　登志子
ほろりっとさせて舞台は幕となり　知恵美
吉野山舞台も燃える中で舞う　良子
　　葭乃

諷して「社用でない社用」と云ったのである。「今日も」がよく利いている。

〔二六九〕
野心家に前後左右が敵に見え　（一善）

野心家というものは、良心的に動いている人間から見ると、実にイヤな奴であり、バカ〳〵しい存在である。その人間の噂をしていなくっても、お互いが談笑していると、すぐにきき耳を立てるし、先輩にはツベコベと阿諛するし、同僚は出し抜くし、実に鼻持ちならぬ行動を平気でやる。しかもそれをさも腕があるように考えているのであるから、コッケイである。斯ういう男にとってはこの句のように、「前後左右が敵に見え」るのである。痛快な穿ち句である。

〔二七〇〕
医学会藪医者同志のむ話　（ゆずる）

「学会でネ」
と藪も筍も、忙しそうに、得意そうにいう。その癖、驚天動地の学説を発表したという声は聴いたことがない。公費で、旅行することだけは間違いないが、この句のように、藪医者は藪医者同志で大いに呑んで、小唄の一つも発表して来るのがオチであろう。お医者さんに叱られそうな句であるが、ワシは藪医者であると名乗って出るような人は先ず〳〵あるまい。

〔二七一〕
所望され膳を股いだかくし芸　（春日）

宴会にかくし芸はつきものであるが、指名されるのを今か〳〵と首を長くして待っている人と、ヒヤ〳〵して首をすくめている人とがいるものである。

この句は舞踊か手品か、その内容は判らないが、所望されて膳をまたいで、出たところを見ると相当に自信があるのであろう。向うの方では、もう、何が出ようと、そんなことには見向きもしないで盛んに呑んでいる宴会風景を思わされる。

〔二七二〕
飛んでも飛んでも鴉夕日に追つつけず　（野甫）

単に自然を詠んだというのでなく、何かを諷した句としてうけとれる。鴉は作者自身なのであろう。鴉が夕日を追うていると観ずるのも、作者の主観に外ならない。人生の果を思わされる静な句である。

〔二七三〕
動物園みな就職をしてるなり　（山雨楼）

動物園の動物は入場料を稼いでいる。その意味から云えば、みんな就職をしていると云えるだろう。それなのに、自分は今、職を失っていると思うと、淋しい感情が身内を流れない訳に行かなかったのであるという句のウラを観ねばならない。

〔二七四〕
蛇足の多さ母も老いたり　（山茶花）

女というもの、殊に母というものは口かずの多いものであるが、それが、だん〳〵云わないでもいいことまでくど〳〵と云うようになったので、母も年を老ったなァと思ったのである。七・七の短句で簡潔に云い切ったので、その味を深めている。

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

お握りで行こかと女同志なり　大阪市　板東千代美
子供もう春の焚火に近寄らず　同
白粉の量とは恋は別らしく　同
灯に向いて舞台の襟をししゆうする　同
惚れ切ってしもたら馬鹿に近うなり　同
身変りの獄で差入れ派手に来る　山口県　安平次弘道
孝行のつもりでなどゝ嫁貰い　同
子を持ってからは子連れに席をあけ　同
根気だけ褒められ保険は断られ　同
録音の社長訓示へ直立し　同
機関車は吹雪に向う胴ぶるい　神戸市　小浜　牧人
ヒロインの老後静かに裏千家　同
病身の気儘に出来るのが淋し　同
罪のない惚気は宿六山の神　同
たよりない英語で真珠並べとき　同
お土産はお肉と知って炭をつぎ　滋賀県　土守トン坊
賞品にされて本意ない洗濯機　同
孫四つ根堀り葉堀りの智慧がつき　同
熱燗にしてと梅見は寒いらし　同
飲める顔売れてるおが猪口が増え　同
早春の海もカメラとアベックと　神戸市　仲どんたく
入学の子へデパートの挨拶状　同
妙齢が隣へ坐る程に老け　同
新入の社員の四つ玉買いにやり　同
隠し芸出さない内に宴が果て　同
正直を見込み税吏が智慧を貸し　大和郡山市　藤田　凡々
役得の酔が朝まで苦しめる　同
罷人を求むと書いて店は暇　同
賑いの枯木にされて断われず　同
みじめさを記す日記をやはり買い　同
新聞の隅まで読むも春のこと　岡山県　田淵　正平
二日酔去勢したよな夫なり　同
鶏飼いと言うは玉子もよう食わず　同
共稼職場へ乳を搾り捨て　同
独り立ちしても保険は親が掛け　同
買取の噂の中に田打する　米子市　勝田　正郎
バナナの値ふとサラリーを考える　同
親戚の出世頭が判を押し　同
手垢にも汚れず聖書書架にあり　同
金借りに来た印鑑をほめてやり　同
蕗の苔の春はむざんに踏まれたり　愛媛県　村上　旭童
上向いてつば吐く様なスト続く　同
泣かれても泣かれても孫だきたがり　同
昔々使った金が今こたえ　同
何もせぬ社長算盤だけは出来　岡山県　宗高矢寸志

幸福を幸福に（六）

戸田古方

古きもの新しきもの

〝ふるくとも僕には仁義礼智信〟

路郎先生の句であります。生々庵氏は紅唐紙に先生の揮毫されたこの句を秘蔵されています。

古いものが幸福か、新らしいものが幸福か、現代の課題にして、永遠の課題でもありましょう。

「今年の附属は全滅や」

私が最近電車の中でチラリ耳にした風評であります。

成績のよいことを自慢にしている学大附属中学校の卒業生が某高校の入学試験に全滅したというのです。

卒業生全部が失敗したというのではありません。一流、二流はそれぞれ落付くところへおちついて、三流どころが心安す立てに志願した足場の近い高校で振られたというのです。

私はさもありなんと思いました。よい学校を目指して、よい教育をというのは最近、自覚した親達の合言葉のようになっています。多少の虚栄もあるのでしよ

二分咲きの陽気に屋根の修理する　同
役得を得意でしやべる勝手口　同
株少し持って哀れや気が小さし　同
切り抜きのなかから今日のお献立　大阪市　竹内花代子
右向いて左向いてる間に花見　同
愛人へ母の愛から遠ざかり　同
夫の親切薬を飲めと言うただけ　同
そのチップ交際費とは妓は知らず　貝塚市　阪本　季良
婦人部長になったばかりに恋が逃げ　同
斗病も妻の根気に助けられ　同
商魂は水車小屋迄薬ビラ　同
へへへまた二日酔かと吊革が　大阪府　青柳扇子仙
人生の端役ばかりで悔もせず　同
途中下車して法隆寺までひとり　同
家の中まで世間態という　同
パトロンを送るにスピッツついて出て　大洲市　島田　一耕
パトロンの合名会社とは知らず　同
差別的親の失言子に祟り　同
失言も結局肚にあったこと　同
僕の家も入れて国立公園指定さる　宇部市　上林　粗影
美しい爪を婦人会で羨まれ　同
正月の葉牡丹そのまま春の風邪　同
冬の夜は短かきものよ餅を焼き　同
想うだけ野暮とは知って居て想い　兵庫県　吉原　紅月
暖かい日にオーバーの重さ言う　同
草餅が好きで田舎の良さを言う　同
人間のもろさへ酒のいい匂い　松坂市　萬濃　修

税金忘れてチヤツチヤツチヤ　同
病人が笑って家中が笑い　同
肝腎なとこは夫としてたより　愛媛県　岩川　一貫
財産を調べて私大合格し　同
初子はいゝな桜坊のよな乳を吸い　同
春闘へ妻大衆としてなじり　兵庫県　前川左文字
課長が変って褌しめなおし　同
人を皆馬鹿にしたよにガムを噛み　同
混乱の世へ電柱は手をつなぎ　岡山県　岡崎　一也
臍くってやっぱりハズの物を買い　同
伝説の橋も文化の補装され　同
焼き捨てた手紙の灰の字がきれい　香川県　香川　雅人
冷えきった恋とも知らず紅をつけ　同
滞納してゝ納税標語に入選し　同
貸してやる顔デパートの化粧法　奈良県　吉田　凡茶
和裁塾花を見に行く予定あり　同
薪能ほんにわたしもよい身分　同
つかまえて欲しい野犬はつかまらず　京都府　柿本　古竹
恋愛中猫もさかなに目をくれず　同
鶯が来たと早よから起される　同
草月流趣味には遠い花を活け　大阪府　石川ひさみ
梅活けて見ても長屋は長屋なり　同
グレーフフと笑ろうて鏡見る　同
畳替えしたら襖が目立って来　岡山県　池上知恵美
芝居めく挨拶もして初対面　同
春の髪へヤースタイル見せてから　同
税務署はゴミ箱までも見て帰り　天理市　仲野花鶴美

う。しかし、小さい小学校の子供が遠い所を電車にのって通うのは全く感心しません。私も小学四年位から郊外生活をしましたのでその経験があるから申すのですが身心の負担は相当なものです。

まあそれはそれとして、そこではたして本当によい教育が受けられるのならまだしも附属の教育といえばいわば実験教育です。可愛い、子供をモルモットにされてよろこんでいるのです。これが附属病院という方ですとモルモットや猿や犬であらかた目どをつけてから人間に適用しますので被害は極限も出来ましようが、そうわいかない精神科学の教育学の実験動物はこれらの一部良家と自称する家庭の子供達です。厳重な素質の検査の結果だとしても葱喰う虫もすきずきという如く実験がうまく合って成功した分はぐん〳〵伸びも

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

春や春一年の計はもうはずれ　同
退院をひやりとさせた今朝の雪　同　景山　素生
農家には慈雨となってる雨が漏り　米子市
バナナなぞ貰えぬ家でよく太り　同
赤門へ魅かれ予備校三年目　同
先輩の負けるコツまで言うて呉れ　大阪市　本多　省三
つつものしまいと見えてキツスさせ　同
昔とったはさみ助役の手をすべり　同
灰皿がくすぶっている淋しい日　玉野市　星川　陽石
二号邸すこし早目に桃が咲き　同
うぐいすを飼う暇もなく父は老い　同
家計簿花に狂うて雑とあり　大和高田市　岩垣日本村
ゴム靴で軍手をはいていて女傑　同
割勘を滞納してるのも春か　同
春近く癒行く午後のクレンジン　貝塚市　杉本　一鶴
春近く喀血シーズンとは悲し　同
ニコヨンの学歴上る就職難　同
花言葉わかってからの疎遠なり　貝塚市　護川　梢月
花活けて立てば御飯のこげ臭し　同
紅つけて見てもベットは淋しかり　同
言うなればマダムの機嫌爛さまし　福岡県　岩田十三楼
世話好きがあくる日も来る爛さま　同
気まぐれにして今月も宝くじ　同
病棟も女患部屋から春となり　出雲市　石橋万古人
クリスチヤン仏滅に退院すると言う　同
抜道が専門らしい顧問置き　同
下を見て暮す心算の家業つぎ　愛媛県　横田　放人

真実を語るあの妓は真珠の眼　同
残りものだけど楽しい母の膳　同　藤本　千永
ハイハイと暴君にして独占し　大阪府
ぬくもって見ている吹雪は美しい　同
飲む事がなけりや方々痛み出し　同
父ちやんの子守おやつが倍もいり　兵庫県　辻　文平
御先祖もやっぱり中程だった寄附　同
悔いてると想えぬ失敗談を聞き　同
甘党は上手に月をほめて喰い　兵庫県　前川　越山
ボーナスがメダカの様に散ってゆき　同
トットットと言ってる時の酒はよし　同
屋敷町たよりないベル押して待ち　東京都　奥津啓一朗
寒々とオートメーション身に迫り　同
春なれど失保のきれた身にきびし　同
卵一つ呑んできて今日が始まる　滋賀県　中島　可十
猥談のその雰囲気に逆らわず　同
秀才の苗字が変り出世せず　同　菱田　満秋
頃合いのレクレーションで婦人会　天理市
税務署で我家の収入教えられ　同
ラブシーン何度見せても堅い妻　同　橋高薫風子
惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華　大阪市
竹植えて雨うつ音を楽しめり　同
悲しみが夜汽車のように遠去かる　同　太田　澄
晩酌へ二本こけしのように立ち　岡山県
ポンポンポンポン舵は女房にまかせとき　同
仮事務所よりうどん屋が先に建ち　同
春はもうそこまで来てるアドバルン　岡山県　佐藤龍山坊

しましょうが、そうでない子供の不倖せはこゝに哀れを止めるということに相成るのです。昔の私の中学の同窓の中にもそうした犠牲者のあったことをおぼえています。付属では仲々上手に準備するのでどんな狭い門でも上手にくゞりぬける技術は仕込まれていますが、入ってからが大変、誇りの殻を捨てきらないのか、十で神童、十五で秀才、二十すぎては只の人となってしまったのです。

戦争がすんでから万事はアメリカの息の下で息をして来た日本、新らしいことのすきな日本人は、いゝところばかりが目についてそれを学び行おうと努力したものでした。しかし今日では余程変って来ています。

第一教科書に対する考え方がちがいます。問答無用の官選教科書で詰込まれて来た日本人、父兄も教師も「教科書は面白くないもの」ときめてかゝっているので、白紙の子供達にもその影響ははっきりと出ていて、色をつけようが、絵を多くしようが、文章にユーモアを加えようが、たゞ小うるさいと感じるばかり、アメリカの真似はアメリカの真似、生徒は試験でおどしつければ見むきもしないのが日本、点なんかやめてしまえばそれこそどこまでだらけるか、いばるか、くさるか、あわてるか、ゆるむか。

デスカッションもグループシスティムも春さきの芝生みたいに近

主婦多忙講習会に来て眠り　同
悪者が負ける公民館映画　同　久家代仕男
来客へパントマイムで立ち上がり　平田市
パチンコへ行くとは見えぬ松葉杖　同
税金を済ました足で麦を踏む　同　北村　三歩
なんのかんのと発起人に書き込まれ　鳥取市
妻の慾空ビンにまで花を生け　同　絹下　南天
酒癖の良さまで頼りない夫　奈良市
日光も熱海もこけし同じ顔　同　川井　美月
花ばかり咲かせ子のない老夫婦　新潟県
死に切れず遺書とは別な声を出し　同　徳永　貴美
病床へとび込んで来たホームラン　西宮市
梅が咲き梅が散ったと聞く病臥　同　塚脇　笑太
買わす気の百貨店で見て帰えり　京都市
火事見舞税務署だけは来てくれず　同　荻原　竹郎
偽札が出たとニコヨン話し合い　群馬県
遅参した革ヂャンパーに拍手鳴り　同　堤　勝三
曜日などお構いなしの日が続き　大阪市
市場籠若奥様で負けてくれ　同　前浜瞼多路
雨読とも言えぬ身分で減にされ　七尾市
肩書の名刺が出来て減となり　同　小田　柳叟
嘘の剝げた夫の顔は笑うだけ　貝塚市
無駄使いおくびに出さず税きびし　同　松永　恒青
アドバルン疲れた様におりてくる　金澤市
金策が出来て花瓶の水も替え　同　神田　豊年
叱る子もない寂しさを妻へ向け　宇部市
意気でゆく疲れを知らぬ次期社長　同　増本　夢人
金かけた芝生と知らず尻に敷き　大阪市　同　杉本たつよ
一周忌生きてなあかんと思ただけ　同　小島さぎす
牛を追う女房になってお気に召し　岡山県　同　児島与呂志
どうしてもお助けしたい投書する　同　小川静観堂
停電へ小心の恋ハットする　貝塚市　同　佐内　隆文
プラットを退院の足しかと踏み　同　岡田百合子
手術待つ廊下淋みしき程静か　大阪市　同　田中蛙眠子
よう〳〵に寝ついた頃に注射来る　同　矢内満寿子
この上に子探し週間催され　伊丹市　同　冨永　孝雅
お茶漬のほんとの味へ金が要り　同　堀　須賀太
年頃を持って年頃目に映り　笠岡市　同　淵川　秀敏
家風には合って居るのに子を産まず　同　永尾　英断
母さんの方がさわいでいる節句　岡山県　同　桝本みのる
予算には入れてなかった薬代　同
神明に恥じぬ監査をおそれてい　鳥取県
流行を追って個性美なくしてい　同
庭の梅へおしめ干す子が産れ　岡山県
保険屋の嫌いな主人早く死に　同
腹癒せにカメラで首を切ってやり　愛媛県
見るよりも聞くのが好きな角力ファン　同
ハネムーン車掌網棚見て通り　大阪府
花嫁が来てから無精髭も無く　同
民謡の噺子の方がにぎやかで　熊本県
草野球フライを追えば麦を踏み　同
無難さを買われて廻り椅子に付き　大阪府
おしめ〳〵春の小川にふくらんで　同
ラッシュアワーに新聞読まんでもよかろうに　大阪市

よってみれば発だけ、重点だけ押えて成功したのはアメリカのこと。戦争でも教育でもアメリカなればこそ出来たことなのでしょう。

如何に教科書をマスターするか、昔流の要点だけを上手にまる暗記させる教科書がなつかしくさえなります。年一年とそういう風に教科書もかわってきております。改悪とも、反動化とも見えます。

終戦のすぐあとで自由万能、自由謳歌の時代に自由と伝統の調和のむつかしさを嘆いた友達がいましたが彼の先見に敬意がはらいたくなります。

自由には頭から責任がついているものだと常識的なことをいう人々の中にあって、責任は自ら発見すべきものだと、根本的な自由を体験さそうとよく周囲と衝突したことのある私ではありました。しかし今はこんなにも早く自分自身の割切れない中ぶらりんにあきれはてゝいるのです。

人類は悲しからずや左派と右派

又先生の句をひっぱり出してしまいました。

反動をこわがりながら、思い切ったことも出来ない、こゝに現代日本の縮図があります。日本自身のなやみなのでしょう。ちっとばかりの豊作や、留易尻の好転でよろこぶのは早すぎます。

古きものには環境との調和があ

あきもせず又も来て居る宣教師　同
賞金の今日は薬価の足しにされ　大阪市　半田　夏生
書置は借金のこと触れてなし　同
恋も又楽しからずや五十路こえ　奈良県　木村よしを
搾るだけ搾って二号逃げたがり　同
子沢山病む子を羨む子を叱り　新潟県　高野むじな
割勘を集めパイプを取りに行き　同
戦争はいやです武器だけつくりたし　福岡県　三上　春雄
よく出来た飯をほめ合う新世帯　同
風の咳止んで冬から抜けた様　宇治市　越智　義夫
結核でない風の咳遠慮せず　同
襤褸かくす心算りのオーバーうらやまれ　鳥取市　岩田天保銭
二人暮し使いもしない洗濯機　同
電車スト儲けたように遅刻する　金沢市　能村美佐緒
さかむけをいたわりながら拗いている　同
はめてもはづしても言いにくい入歯　芦屋市　里田一ン十
忙中の小唄稽古の楽しさよ　同
割勘のタクシー済まぬ程に乗り　岸和田市　金子　紀人
福助の様なお耳へイヤリング　同
斜陽族やっぱり家風だけ残り　大洲市　堀内　暁風
ジャズ好きの子供が逝ってジャズ淋し　同
六球を終日かけて胸をやみ　木村　紅帆
我が口は妻に任せて鳥を飼い　同
唖の真似して押売を撃退し　倉敷市　藤沢不二郎
ふところ手して居て文句だけは言い　同
喰うものも喰はずオフィスガール派手　東京都　下岳　周村
先に居た人は美人と言う間借り　同

雪解けの軒だれ春の音を立て　倉敷市　笠原　亀庵
不如意さを陳列棚に見透かされ　同
姉妹が揃って夫尻に敷き　大阪市　三好　澄泉
芸一筋がいつのまか老妓なり　同
ボディビルW形Mにしてしまい　今治市　越智　一水
親切が過ぎ迷惑な事にふれ　同
撥もてる二号の縫いも編みもせず　鳥取県　鈴木村諷子
恩給で二食で高利貸している　同
垣何時の間にやら抜ける穴が出来　高知県　島崎　秀保
逢い度さは頭痛と成ってあらわれる　同
アイロンの一掛け欲しい襟で来る　和歌山県　木下一休
すくすくと肩身の狭い子が育ち　同
お固いと言うは昔を知らぬ奴　神戸市　佐野蜃気楼
与三郎に似た押し売りが坐り込み　同
橋一つ出来て老舗のさびれ様　玉野市　三宅蚊角歩
見舞われる身でお天気が気にかかり　同
日直の電話彼女へ派手にかけ　岡山県　池田　文女
仰山に言って指先ふれただけ　同
貴女でしたらと高い方買わされる　玉野市　小板つよし
半分は話のタネに見舞うて来　同
手相では五人の母と脅かされ　倉敷市　野田　一念
万歳の音頭取るためのモーニング　同
税務署の帰った跡は掃き直し　松江市　三島　一兆
手ばなかむ或日の無学ふと哀し　犬阪府　田中　無極
世辞を云うつもりの年齢合ひ　群馬県　荻原　竹郎
雨漏りも直せぬまゝに子は育ち　堺市　杉前　南宗
デパートで値段見て来て他所で買い　石川県　林　古意知

り、順応があります。Good Old という言葉はこんなところから来ているのでしょう。平和と安静があります。しかし、その安定を安定させているのは多く権力の存在のためでありまして、人々が事大思想をさえ批判しない状態におかれているからなのでしょう。まだまだ日本には封建の残滓が各所にみられます。

孫文の三民主義にはじまる中国の改造はソ連とむすびつくことによって一足お先きにあの伝統の古い漢民族の国に実りつゝあるようです。中共の生活がどのくらい幸福であるか見聞も体験もない私にはいいきれません。

無自覚なるが故に平和であった中世や徳川時代を決して幸福だと思いはしませんが、人間革命をともなわぬ人間幸福はむしろこの方が確実だともいえます。西洋近世の悲劇、中世後半にはじまり、フランス大革命をクライマックスとした人間幸福の追及はたして幸福であったでしょうか、いわば斗争の歴史であり血で血をあがなっていたとも見えます。

中国やソ連には人間革命も平行して行われているといゝますが、人間が改造され、人間の精神が改造されたら、社会の問題は自ら解決することです。

書きながら自分でぐるぐるまわりをしているような気がします。しかし、それが所詮は人間というものかもしれません。

正か反か、物か心か、右か左

大衆へ孔雀はショウーの様に ふせ 岡山県　小田　紫草
終電にも人情あった二三分 貝塚市　津田乃武康
恋人がよらば切るぞの形で逃げ 岡山県　松島　不在
二人で来いとボートの衣替 岡山県　藤居　裕天
臥て五年福耳持って生れたに 貝塚市　村田　五耕
働いたばかり入歯もせずに逝き 笠岡市　木山　遠二
割当で出す寄附金もよそをきゝ 笠岡市　谷本　無茶
誕生の赤ん坊 まびが チヤッチヤッチヤ 京都市　児玉　桃郎
脳味噌を洗ってみたい自己嫌悪 大阪市　山本　立児
聴き役のつらさ課長の三下り 宇部市　平田　実男
もろて来た菓子へ玉露が欲くなり 笠岡市　木山　二路
賞められたネクタイばかりで通い 大阪府　浅野　瓢太
おだてには乗らぬ娘で嫁き遅れ 石川県　松高　秀三
幾辯もある顔と乗る終電車 岐阜県　加納　幸児
言い訳のドアは細目に開けて入り 玉野市　松岡　コンパス
あの人の好みにあった帯ときめ 笠岡市　出原　真奇
いら〳〵とするは貴女が叱るから 大阪市　池戸　桃村
感慨や如何に見事なカムバック 大阪市　松本　源一
もう一押 のぞ ところを訛で邪魔にされ 奇森市　森本黒天子
頼る子の寝言を妻は淋しがり 和歌山市　岡本　三楽
譲り合う席に子供が来て座り 大洲市　尾花　群雀
天ぷらのしぶきに新妻遠く居る 熊本市　星野　草柳
もう一本だけに女房おがまれる 天理市　岡田　梅林
掘り下げて研究したら行詰り 岡山県　沼田　三六
発表と別な時間で開会し 今治市　池内　好日
ほろ酔いを理想としてもつい梯子 呉市　青木　微酔
貸ボートオールと口は反比例 大阪市　伊藤　光二

人生のたそがれらしく炬燵抱き 笑 ゑ 温市　和田　蛾燈
停年もなく落ちつける職につき 松江市　岡崎　祥月
一時金墓石の大きさもて余し 鳥取県　山根　素瓢
感冒気味だが今日は給料日 宇部市　上杉　雪峰
ロマンスグレーなどと父を か ば 口し 倉敷市　矢吹十九一
手細工の五人ばやしは踊っている 兵庫県　林　澄子
嬉しい日母も映画へ追い出され 米子市　松本　水鏡
末っ子はよく遊ぶ頃よく守り 廣島県　山田スミ子
三度目の嫁も大安日を選び 岡山県　秀川　承平
倖せがつづく余生であって欲し 安来市　八杉　風車
うちの子も庶民に生れよく笑い 松江市　舟木与根一
年頃が三人パパ頼りにしてまっせ 倉敷市　藤井　五茶
牛乳で育つ自信に子を貰い 岡山県　宗森とも子
当然のように本妻豆々し 米子市　石坂　新雪
病は気からとマンボを唄ってみ 高知県　北川　真一
未だ見ない娘貰えと母が惚れ 高知市　小松　梅林
雛祭り間貸に似合う豆人形 倉敷市　平光　峰豊
足弱の味方のように団体旗 石川県　塩谷三思楼
拝み屋は器用に神と話をし 大阪市　西川　晃
待つ人は来すに気持の減入る雨 宇部市　岩原　箔川
存在を見事に示した海水着 高知市　須藤　俊江
意地悪く養老院を嫁が賞め 倉敷市　荒木　狂風

自分の句のよしあしを早く知る方法として投句される前に、自分の句で、これがいいだろう、この句が抜けるだろうと思う句に、印をつけておくこと、そして抜けた句と照合されることをおすすめする。

か、その信ずる所に忠実な人々によって、そのディスカスが合を生み、聖が生れるのかもしれません。諦めにしては早すぎるのかもしれません、実験教室の是非も速断すべきではないのでしょう。たゞ問題は踏切る若さであり、熱であり力であるといえましょう。

青ペン　赤ペン

多い日には電話が二十回位間違ってかかってくる。線の故障らしいがまったくウンザリする。「うどん屋かすし屋なら得意先を失ってしまうね」と先生も呆れた顔をなさる。途端に又リリッときた。「違いますよ」と言いかけたら「私、米子の三鴨美笑ですが先生御在宅でしょうか」

◇

月の半ば過ぎ、編集室は戦争状態に入る。先生ご一家は挙げて校正に印刷所往復に、翌月号の原稿整理にあらゆる選に、お食事も手の空いた人からという有様である。この中にあってキチンと時間通りに食事をするのは猫の丑松クンだけである。二階へ上りたい、近所の恋人（イヤ恋猫）に逢いたいと思えば、襖や障子の前で座込みをやる。ニャァ〳〵の連続である。結局根負けするのは人間さまのほうである。青ペン赤ペンが机上を走るこの大多忙のさ中、誰かがペンをおいて立ってゆかねばならぬ。——猫の手も借りたいという時に。（不）

直原湖月さんを訪ねて

（女流作家訪問記15）

丸尾潮花

川柳塔でお馴染の作家直原七面山氏の夫人湖月さんを久米南町のお住いにお訪ね申上げると、夫妻お揃いで気持ち良く出迎えて下さった。

湖月さんの本名は静代さん、お歳は四十歳になりましたとおっしゃる。お務めはとおたずねすると、弓削保育園ですと言われる。湖月さんは純白な洋装がとても良くお似合になり理智的な奥様でいられる。初対面と言うためか少し堅くなっていられる湖月さんが茶を進めて下さる。

「苑女さんをお訪ねするため日生に廻りましたのでお約束の時刻が大変遅くなりました」と夜間訪問の失礼を先ずお詫びすると

「苑女さんお元気で居られましたでしょうか。暫くお逢いして居ませんので心にかかって居りました」と柳友としての苑女さんを案じていられる湖月さんに心の温まる思いをさせられた。

「お元気でとてもお店がお忙しい様でした」

「そうでしたか随分久しくなりますので」と思い出を辿る様な瞳をされる湖月さんへ

「湖月さんは暫く作句から遠ざかっていられた様ですが」

「えゝ　二十八、九年の二年間と言うものは作句から遠ざかっていました。それは私が病気をしたり、職業に就いたりした関係で何んだか落ちつかなかったものですから、でも此れからはずっと作句を続けて行きたいと思って張り切っています」と明るい声で笑われる。

「七面山さんの作品について、奥様でいられる湖月さんには一寸おたずねしにくいのですが、御主人の句をどの様に感じて居られるのでしょうか」

「そうですね。主人の作品は最近少し作風も変って来たのではないかと思いますが、どうかしますと自然自分のホームグランドと言いますか肉体の世界に戻ろうとしている様は見えるのです。けれど私としては、こうした意味の句や又余り理屈っぽい句は好きではないのです」と主人の句に対しての批判をハッキリと答えられる湖月さんであった。

「女流作家として特に好きだとか嫌いだとか言う句は有りませんか」

「女流作家としましては先ず何と申しましても馥乃先生でしょう。主人から句集「福寿草」などを読ませて頂きまして自然に頭の下るものを沁み〴〵と感じさせられるほどいい句が沢山御座います。次に梨里ちゃんでしょう。他の方では大阪の千代美さんの美しいリズミカルな句です。

（掌でまるめて捨てる三の糸）

と言う句が有りましたね。あの句などはとても好きな句でした。

「句はその作者の個性に依って、リズムも、着想も、表現法も異って参りますので、自然句を読まれる方の批評と言うものも多少違って来ると言えましょう。あながち肉体派の句がいけないとも言えないのですけれど、女流作家の多くの方達からは玄関横付けと言った感じの句は受け入れられない様ですね。句から横道にそれますが御家族は御夫婦以外においでの様ですが」

「親子三人の外に七十六になります母と未婚の妹の五人暮しです。母も川柳が好きですので月一回の句会には母からせきたてられて出かけて行くと言う位いですので此の点大変恵まれています。」

「それは結構ですね。趣味も家族の方の理解が得られないと特に女性の方は出かけにくいですね。女流作家の多くの方は御主人が川柳家でないと言われる方が多い様です。しかし、最近は奥様の小さな趣味として大変理解をもたれ、側面から奥さんに協力をしていられる方もあって、私達までほゝ笑ましく思っています。湖月さんお子さんは」

「今小学校の一年生になる女の子が一人です。最初に男の子が産れましたが六才の時病を得まして今の子と入れ違いの様に亡くなりました。それからずっと一人なのです。主人は希望としまして女流作家にすると言ってますが本人は女のお医者さまになるなどと言ってるんです。さあ、此後どの様に伸びて行って呉れますか。主人も岡山市あたりの句会でしたら何日も子供を連れて参りますが、子供も喜んでついて行くんですよ」とほゝ笑みながら話された。

「もうそろ〳〵退陣をしたいと思いますが、湖月さんの処女作を伺わせて頂きましょうか」

「処女作って私の好きな句なんですけれど

（名僧の頭デコボコ〳〵し）

（涯て知れぬ淋しさ逢いに行くときめ）

でしょう。最近は自分でもあまり良い句が出来ませんので困ってるんですの」と謙遜をされる。湖月さん御夫妻の健吟と今後の努力を祈りながらお別れした。

次は「小西富士子さんを訪ねて」

お酒の前後に
メルチオB12錠
二日酔・悪酔
肝臓疾患に
20錠50錠100錠
武田薬品

柳界展望

▼本社五月川柳句会は、五月七日（月）午後六時から下寺町市バス停前の光明寺で開催、新緑の好季、寺庭の若葉に、潑溂とした新鮮味を味いながら作句することにした、多数参会されたい。▼南区医師会杏林川柳会（大阪市）は四月廿四日午後七時半から生々庵居で開催▼既報、川雑婦人友の会の篠山観桜吟行句会は、四月八日、決行、川雑篠山支部の肝入で盛大に開催、土地の銘酒に婦人友の会の前途を祝福して乾杯、歓を尽された。▼富田林市の富柳会は、五月五日午後一時から富田林市役所日本間に開催▼川雑鳥取支部鳥取川柳会主催鳥取県市外九団体後援の、鳥取市復興記念山陰川柳大会は五月十三日（日）午前十時から、鳥取市児童会館で開催本社から路郎師夫妻を迎え開催、鳥取砂丘見物、「傘おどり」の余興、懇親会等多彩な企画を以て開催。▼大阪逓信病院川柳会は四月廿一日午後二時から五階講堂で開催▼南海電鉄川柳会（大阪市）は四月廿三日午後六時半から粉浜親和寮で例会開催。以上何れも路郎主幹出席▼川雑淀川支部句会（大阪市）は五月二日午後六時から東淀川区三津屋北通四ノ二九武部香林居で開催。兼題「ポケット」「仲裁」「ミキサー」の三題▼岡山県金光図書館長から路郎師の「川柳とは何か」を盲人のために点訳許可の申込みがあった。全国の盲人に無料貸出される日も近い。▼大阪市交通局川柳会五月例会は五月十六日午後五時局町同局病院サンルームで開催。「応援」「ひま」「冷汗」の三題▼川雑米子支部松露川柳会（米子市）の観桜句会は四月八日安来市社日で開催▼川雑松江支部句会は三月十五日午後六時からなにわ旅館で開催▼川雑大原支部（岡山県）三月句会は、十六日夜ゆたか居で開催▼川雑岡山支部三月例会は、十日午後六時から第五鉄道寮で開催▼「大阪ゆう・もあ・くらぶ」の発起人会が三月二十八日午後二時から大阪東区今橋クラブで開かれた。実業人、文学者、芸能人など各界の文化人が網羅され、路郎師は常任理事に推された。▼日本海新聞の文芸特集に「川柳鳥取」と題して河村日満氏（川柳に詠まれた川柳家）大西八歩氏（趣味を持つ楽しさ）桐谷散歩氏（ものの真実に触れる）森田茗人氏（短冊に画く）をそれぞれ執筆され川柳鳥取の健在ぶりを発揮された。▼川雑備前支部（岡山県）三月例会は、二十四日午後六時から久米雄居で与誌雄氏送別、故半仙氏追悼句会として開催▼久良伎忌（東京都）を四月八日一時から丹若会主催で開催された▼川雑米子支部松露川柳会三月句会は、十一日午後六時から節枝居で開催▼岡山電報局川柳会は、三月十七日午後六時から同局で開催▼備幸川柳社（岡山県）は、三月十九日午後六時から宗白居で開催▼番傘川柳社では五月三日（祭）川柳躍進を記念する「川柳まつり」を大阪四天王寺本坊名園で催される。▼富柳会（富田林市）四月句会は七日午後一時から富田林市役所日本間で開催本社より富岡淡舟氏出席▼3・3・3川柳会（堺市）四月句会は、九日午後六時から島野工業株式会社会議室で開催▼岸和田川柳会（岸和田市）は、四月十一月午後六時から同市蛸地蔵駅前丸二食堂で開催▼「税のしるべ」創刊七周年記念京阪神川柳大会は、税のしるべ総局主催、毎日新聞社協賛で三月二十一日正午から大毎、三階大講堂で開催▼さつき川柳社（大阪市）は食満南北翁の喜寿を祝う会を四月十二日午後五時半今橋二の美術クラブで開催▼番傘わかくさ川柳会（大阪市）創立十周年記念川柳大会は五月十三日正午から下寺町、金台寺で開催▼鼓川柳会は、四月十四日午後六時から住吉区粉浜中ノ町松岸寺で森鶏牛子を偲ぶ句会開催▼神戸新聞社及在阪神詩文芸各結社主催の阪神六市連合文芸祭が、五月十三日午後一時尼崎市立文化会館で開催▼梶川蘇堂氏（吹田市）は三月二十七日早岐に急用、寸暇長崎を遊覧「西海に陽は落ちんとし墓に映ゆ」の旅信を寄せられた。▼塚口敏郎氏は、枚方市中振二七四七に転居▼大万川柳第五輯が三月十八日大万川柳会より発行▼山沢英雄（緑々）氏校訂の俳風柳多留全五冊が完成された。新資料の発見と研究により全面的に改訂された定本で柳界に亦一つの炬火が点ぜられた。岩波書店発行、定価百六十円。柳人必読の書。▼川柳新書第七集「中野懐窓集」第八集「渡部柳魚集」が東京都板橋区上板橋町三丁目六三五九門馬哲哉方川柳新書刊行会から刊行非売品▼路郎師は毎日新聞へ「ユーモアの喪失」と題されて執筆された。私は生きてゆくために、どこまでもユーモアを愛し、そうした句を育ててゆきたいと述べられ、「アルサロをやめても人をつねる癖」花村、「骨立てたまま二次会へついて行き」豆秋、「みおつくし大人が聞けばまだ十時」鬼酔諸氏の句を引用された。▼川雑松江支部四月定例句会を十四日午後一時より檜木山配水場で開催。▼京都新聞に「京都柳壇」新設。京都川柳作家協会の福永泰典、平賀紅寿、北川絢一郎、田中烏雀（川雑京都支部長）伊藤入仙、西沢青二の諸氏が選を担当されることになった▼函館川柳社は四月十五日午後五時半より鶴岡町鶴友会館で開催された。▼石曾根民郎氏は読売新聞長野支局で時事信濃川柳をこのほど担当されることになった。（摩）

飛燕往来

西村利里氏

（三重県湯の山温泉）より

——路郎・曹月宛

今湯の山で谷川の水音を聞きながら夕食を済ませたところです。思ったよりも疲れていませんから安心して下さい。此処は駅より随分高い所で石段をいやと云うほど登らされましたが非常に静かな所です。

正　誤

▼三月号二十三頁三段七行目「週刊紙」を「週刊誌」に▼四月号三三頁山陰川柳大会の開催日五月十四日（日）は十三日（日）と訂正▼四月号十八頁二段二行目青柳扇子仙は青柳扇子仙と訂正

源頼政（六）

——最後——

冨士野鞍馬

足利忠綱の渡河によって、平家の全軍は、平等院へ攻め入った。この戦いのまぎれに、頼政は、高倉の宮を、奈良へ向けて先立たせて、自らその一類、渡辺党、三井寺の僧兵と共に防戦したが、弓手の膝口を射られた。次男の兼綱は討死し、長男仲綱は、平等院の釣殿で自害した。

源三位入道をかんでくやしがり　（拾　六）

頼政のむほん茶の木をいりにされ　（タル　四）

茶畑を頼政勢がふみちらし　（〃　五一）

等と、川柳は明朗に客観しているが、

「平家物語」に

「三位入道渡辺長七唱（とな う）を召して「わが頸打て」とのたまへば、主の生頸打たむずる事の悲しさに「仕るとも存じ候はず。御自害候はば、その後こそ賜り候はめ」と申しければ、げにもとや思はれけむ。西に向ひ手を合せ、高声に十念唱へ給ひて、最後のことばぞあはれなる。」

埋木の花咲くこともなかりしにみのなるはてぞ悲しかりける

これを最後のことばにて、太刀の先を腹に突き立て、うつぶしざまに貫かってぞ失せられける。その時御歌詠むべくはなかりしかども、若くよりあだがちにすいたる道なれば、最後の時も忘れ給はず。その頸をば長七唱が取って、石にくくりあはせ、宇治川の深き所に沈めてけり。」

この「埋木」の歌に対して、

埋木と朽木源氏の運不運　（タル一〇八）

——朽木は頼朝が助かった好運——

うらみぼい歌ばかりよむ源三位　（タル二二）

——「人知れぬ」とか「上るべき」とか——

頼政の辞世が宇治の要なり　（タル六四）

源三位毛うけの上で詠んで死に　（〃　九六）

等と、扇の芝をかけて「要」かなめといい、毛受（頭を剃るとき剃毛を受けるものが扇形であった）といっている。

頼政も扇つかいはけちなこと　（万安九）

源三位窮屈そうな腹を切り　（タル七）

平等院手受のやうな古蹟あり　（拾　六）

末広はめでたくもなし源三位　（タル一四四）

頼政の古郷は宇治の要なり　（〃　五〇）

今行って見ても扇の芝は狭く感じる。これ等の句も、頼政と扇とを扱っている。

螢飛ぶ下に哀れな扇なり　（タル二五）

ほたるさへ負けて平等院へにげ　（拾　六）

頼政の扇へ夜の金砂子　（タル四三）

合戦は宇治の螢で見るばかり　（三　八）

とまた、扇と螢とを詠んでいる。

不朽洞だより

▼北川春巣博士（大阪市）は三月三十一日博多着、一日からの学会に出席された寸暇に山根白星氏と盃を傾けて歓談されたと▼麻生梨里編集長は、今回大阪府河内市本庄、西村英雄氏と良縁を結ばれ四月十三日の吉辰を卜し電雷会館で華燭の典を挙げられた式後新婚の旅に出られた。お慶び申上る。▼中島生々庵博士（大阪市）は四月十四——十九日松坂屋五階で開催された毎日新聞主催の日曜画家展に「勝尾寺」を出品された▼丸尾潮花氏（大阪市）は川雑婦人友の会所用のため四月二十九日から三日間の予定で岡山県の弓削・鏡野方面に出向かれることになった▼市場浸食子氏（大阪市）は日本薬学会並びに通信薬学会に出席のため（令閨同伴）四月三日九大へおもむかれる途中、別府と雲仙へ立寄られ六日博多着十日に帰阪された▼阪田良坊博士（下関市）は、三月十五日、日田市で開催の日田線全通記念式典に鉄道関係の代表として又臨時救護班長として列席、全市はお祭り騒ぎの盛況振とのこと。「祝杯をさゝげる車中の万国旗」の旅信を寄せられた。▼水谷竹荘氏（大阪市）は夫人同伴三月二十八日箱根伊豆山、東京を廻り上諏訪温泉に入湯、浅間を経て信州松本に行き、不朽洞会員の石曾根民郎氏を訪問、銀婚後三年目記念旅行として、上諏訪より「諏訪の宿湖水の魚が膳にのり」の句信を寄せられた。▼阪田良坊博士（下関市）は、三月二十二日広島鉄道管理局で開催の院長会議に出席、二十四日は山口県小郡鉄道診療所新築落成式に代表として列席された。▼神谷凡九郎氏（大阪市）の令閨は三月四日二女史子さんを出産、母子共健康の由、お欣び申し上げる。▼坂手有子さん（岡山県）厳父亀治郎氏は三月六日胆嚢炎で逝去された。謹悼▼佐野卜占氏（八代市）は四月廿二日に北九州方面へ旅行されるので下関の柳人の方々にお会い出来るのを楽しみにされている由。▼弘津柳慶氏（下関市）は、亭売公社下関支局川柳会を指導、会報発行の外「川柳雑誌」の普及賜読に尽力中とのうれしい消息を寄せられた。▼佐野卜占氏（八代市）は、三月十四日出発、一路東京から京都、大阪と多忙な旅をつゞけ、今回は路郎師にも会われず、雨の奈良、大阪を見物して二十日帰国された。▼河村瑞川医博（大阪市）は、四

これで、いよいよ、頼政の打倒平家の計画は失敗となった。

鵺きりでおけばよいのに哀れ也　（タル二）

——ヌエ退治は素晴しかったが——

寺宮を入れてまけたは源三位　（〃九）

——寺は三井寺、宮は高倉の宮——

宇治の川切りたへたへは源三位　（万安九）

——百人一首権中納言定頼の歌

朝ぼらけ宇治の川霧たえたえにあらはれ渡る瀬々のあじろぎ

の文句取——

非業の死でも御年の上頼政　（タル二九）

——頼政は喜寿であった——

こうして戦が終ると、

頼政の跡が当分船渡し　（タル一四九）

頼政が死ぬと仮橋願ふなり　（〃四）

宇治橋をすこし落したので、こうでもあっただろうと、江戸人は詠んでいる。

宇治川はたのみに思ふ川でなし　（タル十三）

源三位ヌエとむほんは雲と川　（〃十四）

結局は、宇治川もたのみにはならなかった。それで、上ミづってしそこなったは源三位　（タル八）

馬くづしをくいそこなった源三位　（タル十六）

「馬くづし」は宗盛を指す。

「上ミづって」は高倉の宮。

それでも、うまくゆけば首尾よく行くと源二位になるところ　（万安九　タル一一九）

であった。

しかし、これが平家打倒の前夜であり、新しい時代の序曲であり、先駆となったのである。それを川柳はうまくうたっている。

頼政は前狂言をしてしまい　（タル十六）

この頼政の企てを、史書は、

「源頼政法皇をすくひたてまつらんとせしも、宇治に敗死し、頼朝、義仲ついでおこれり」

と書いて居り、高倉宮の令旨によって、諸国の源氏が奮起したのであった。この企ても、もすこし敏捷にやれば成功したのかも知れなかった。

「平家物語」にも、

「さる程に、南都の大衆七千余人、兜の緒をしめ、宮の御迎に参りけるが、先陣は木津に進み、後陣は未だ興福寺の南大門にぞゆらへたる。宮ははや、光明山の鳥居の前にて討たれ給ひぬと聞えしかば、大衆力及ばず、涙をおさへて止りぬ。今五十町ばかり待ちつけさせ給はで、討たれさせ給ひける。宮の御輦のほどこそうたてけれ」

と書かれてある。五十町というと、一時間早く、奈良の僧兵が宇治に着いていたら、また歴史は変ったかも知れない。

ここに一つ、頼政後裔の句がある。

人こそ知らね頼政が娘なり　（タル二六）

百人一首の、二条院讃岐の歌に

わが袖は汐干に見えぬ沖の石人こそ知らねかわく間もなし

があり、その讃岐が頼政の娘だというので、歌の文句を取って作られている。「峯のかけはし」に

「讃岐は源三位頼政の女なるよし諸抄に見えたり」

とあるが、実は孫であったようである。

なお、頼政は、歌人でもあったので、「従三位頼政郷集」という歌集が残っている。とまれ、頼政は、頼光五代の孫として、晩年を華々しく終った。

月十四—十九日松坂屋五階で開催された毎日新聞主催の日曜画家展に出品された▼木下幽王氏（大阪市）は二月廿五日から住吉神社前の小松原病院に入院加療中漸く床に起き上れる様になったとのこと一日も早く快癒を祈っている▲大西迷窓氏（高知市）は、川雑高知支部の拡大に努力するかたわら高知敷紡の文化部に川柳の指導をされることになった▼池沢白翁氏は白翁居を堺市南田出井町四丁七六に移された▼田中辰二氏は三月限で熊本大学教授を停年退職された。今後は川柳のために一段と力を致されることをお願いする。因みに同氏の句碑が金剛川柳会の淵川秀敏氏等の手で四月十五日に八代市敷川内町の敷川内神社境内に建設され記念川柳大会が催された▼桑原養痴園氏（大分市）は、三月一日から大分市唐人町（電二四一五番）へ診療所を移転された。▼長野井蛙氏（防府市）は、防府市西佐波令字幸地一三一六の一六へ転居。▼楠田英子氏は二月限り▼好崎申仙氏は四月限り何れも家事の都合で退会された▼私は、徳予同伴三月廿四日の本会常任理事会を欠席して、夜の九時半の関西汽船須磨丸で四国高松航路に乗船、翌朝濃霧で高松港に、二時間延着、屋島、善通寺、琴平巡遊、同地宿泊「琴平ヘバール記念」として来り」と作句帰阪　（摩）

新会員紹介

四月

辻　圭水（堺市）正　貴山氏推薦

松岡委滄浪（善通寺市）正　葭乃氏推薦

社の黒板

★川雑大聖寺支部（石川県）は、支部長野村味平氏の転居に伴い、四月五日から石川県江沼郡大聖寺町字永町四十八番地同氏宅へ移した★麻生梨里氏は去る四月十三日結婚され河内市本庄へ移られたので、本社の編集長を辞された。姓も西村と改姓

川柳第二教室

作句指導

戸田古方

研究題「草」

春の草代議士などに踏まれるな　路郎

どんな題が出てもその題を扱った名句というものはあって、作句の際、参考にもなり、時には邪魔にもなります。しかし先人の名句といっても全てをふくんでいるわけではありませんから、それを越す句を目指すべき努力をおしまないことこそ大切ではないかと思います。

青草へ逆立ちしたいうららかさ　牧人

道の草喰い喰い馬も昼にする　初甫

春といえばのどか、のどかといえば若草萌える野辺を思いうかべます。この二句は何も考えないでたゞ春の讃歌を拾い出してみました。

しかし川柳家は川柳家らしい観点でいつまでも自然讃美には終っておりません。自然と人生へのむすびつけに努力します。冒頭の先生の句の草も擬人化されていまして、その擬人を通してデモ代議士への諷刺が飛び出してくるのです。

踏まれてもたゝかれても雑草のたくましさ　草柳

三日目は腹が立つ程草が生え　行弘

陽の当る当らぬ所も草萌ゆる　登

道端の草踏まれても踏まれても　直路

道端に踏まれる草の茂りよう　古意知

雑草を見習え弱き心臓よ　どんたく

六句ならべましたが旺盛な生活力の象徴としての草がよまれて居ります。そして若さと力がたゝえられているのです。相当の句数の中からぬき出しましたので一応は見られる句なのですが

第一句の欠点は二十一音とずい分な字あまりになっていることです。中七を走り読みにしてやっと定型らしいものを感じはしますが

踏まれても草よ負けるなたくましく

としてみました。

句主の希望、主観がクローズアップされはしましたが、原句の現状を描写していると少々ずれてきています。そこで次の句で落着けて見ました。

草のいのち叩かれようが踏まれよが

次の句の「三日目」ですが、数字はよく考えて使わないとへんなものになります。こゝにある「三日目」は適当でまあこんなところでしょう。それにしても「腹が立つ」といわずにそれがいえないものでしょうか。草のいのちと人間の身勝手が矛盾しはじめました。

草のいのちのたくましさが「陽の当る当らぬ場所」にまで及んで来たのが第三句。「当らぬ所」と一方だけを強調すれば充分なんですが。

第四句、第五句は水準句ですが、このまゝでは古すぎます、こゝを踏切台として、こゝから一段と飛躍して下さい。

最後の句の「弱い心臓」は直接ズバリといった所に面白さがあるのですが、も少し何とか色つやを出してほしいと思います。

草取りに知識があってはかどらず　千永

草むしり又も日課の春となり　文平

さきの第二句の「腹の立つ」句と同じねらいですがこの二句は人間を前へ押し出して来ているのです。広い芝生のある家に住んでいた頃、私も草取りに「知識があって」はかどりませんでしたし、日課であることをのろいもしました。雑草だって大自然のいのち、生きているのにと変な理屈をつけてサボろうとしたことがありましたので大いに共鳴出来ました。

句としては千永さんの方が穿がはっきりしていて好まれるでしょう。文平さんの「日課の春となり」は平凡な表現のうちにヤレヤレ又かなわんわいという気持がよく出ています。

馬や牛草一杯の野が恋し　豊年

窓一パイの世界に草の芽が動き　文平

デズニーの「滅び行く草原」を見てきてこの句を見直す気になりました。文明なんて馬や牛の知らぬこと、又窓は小さい人間の営みにすぎなくとも、そこから大自然の偉大な片鱗をのぞかせている文平さんの句、やはりスケールの大きなたくましい句です。最初の六句とはちがった味と広がりをもっています。今月の佳句でしょう。

✓井戸水の雫で育つほたる草　初甫

✓よく眠る子の手に草の香が匂う　登

春の陽が苦笑している草枕　亀庵

麻生葭乃著・米田三男之介装幀
葭乃句集
福壽草
定価二百五十円
送料　三十円
菊半型・函入
本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。
大阪市住吉区万代西五の二五
発行所　川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇番　電話住吉（六一）六〇八一

打開ける仕草に草がむしられる　英断

寝転んだ草にも愛惜しむなり　雄声

春草に似て蔦の輪飽かず見る　柳叟

草と人間といゝたい一章です。初甫さんはほたゝ草が井戸の雫で育つのを見つけておられますが婦人らしい美しさとデリケートをいたゞきます。

登さんのこの句はルネサンスの名画に見るマドンナの像のように丸々肥った子供が想像され、しかも伸び行くいのちの草の匂がモンタージュしてたくまない美しさです。

漱石の草枕がピンと来てなる程なあと苦笑するのが亀庵さんの作。

英断さんはよく見る風景で類想を感じさせはしますが雑草礼讃の一役を買って下さっています。

雄声さんも柳叟さんも草にねているのでしょう、道具を使わずに草をいとほしむのと、蔦の輪をもって来たのとちがっても、

「春や春、春じゃのう」

というところです。

前回の蕾といゝ今回の草といゝ、いさゝか自然礼讃に傾きすぎた様にも感じられますが、日本の自然は犯しがたい厳しいものではありません。人間があまえて行けばあまえさしてくれる自然です。

ロッキーのかなた「滅び行く草原」のように滅びなければならない自然ではありません。日本人の心のよさも、またいたらなさもこの自然の中から生れて来たことを思いますとき、しかも自然詩の看板でゆく俳句と異り人生詩である川柳でも、これだけこなせるのです。私たちは機会ある毎にもっと自然と人生の研究をつゞけて行くべきでしょう。

研究題　「星」
〆切　五月十五日
発表　七月号予定
投句先　豊中市本町三丁目二〇一
戸田古方

受賣りばなし (1)

不二田一三夫

ホッピング

子供のボディ・ビルとして、昨年十一月ごろからどんな場末の路地にでも、こどもがピョン、ピョン跳ねて遊んでいる風景を見かける。ナワ飛びと竹馬をチャンポンにしたようなホッピングは、アメリカのニュース映画に出たホッピングの軸に〃手持ち棒〃を取付けた玩具である。七百円位いから千五百円という安価なので、ギャング遊びのピストルより親たちにも歓迎されている訳である。ピョンと踏むと一尺ばかり飛び上るので、大人でもやってみたくなる。路郎先生のお伴をして街を歩いている時このホッピングに出あった。

「ちょっと飛んでみたいね」と先生も仰言る。すこし熟練すると鬼ごっこも出来るらしい。各小学校でも、体育用に使い始めたので今年は大人のボディ・ビルにかわって、子供のホッピングブームが現出しそうである。

◇

選挙風景あちら版

また参院選挙が始まるが、南ヴエトナムの選挙では字の読めない人のために、選挙ポスターに候補者の写真と共に候補者のマークを印刷してある。鍵の絵の人もある。有権者は投票場へ行くと各候補者のもろもろのマークである絵を貰って、その中からその絵を選ぶのである。日本なら三木武吉あたりは狸の絵にするだろうし、吉田なら犬、鳩山ならハトというところであろうか。

◇

アロウ・ライン

H・A・Yラインに引続きディオールはアロウ・ラインを発表して世界の服飾界をきたアッと言わせた。この新しいシルエット、アロウ・ラインは、標的をねらう〃矢のような型〃という意味だそうである。ハイ・ウエストの細い胴に矢型の肩線がつき、スカートはストレートの形。肩から腕にかけて下った斜めの線と丸味を持った特殊なソデ付に女心が射られるのである。背の低い日本人にはAラインより着こなしやすいのでアロウ・ライン時代がくることは間違いなさそうである。

句会の兼題に出るかも知れないのでそろそろ試作にとりかかっている。気の早い人はもう雑詠にかかっているのではないかナ。

◇

しかご川柳

川柳熱は日本だけではなくアメリカでも相当なものらしい。がり版刷りの「しかご川柳」という小冊子に

ネオン熱街の温度を六度昇げ

という句がある。ネオン満巻く大ニューヨークがしのばれて、ちょっとドギモが抜かれた。

一食が二百弗てふカフエー過ぎ

日本流になおして約八万円の晩めしになるので、アチラ様でも庶民生活は、いずこも同じということらしいと報ぜられている。

「二百弗てふ」と、てふと書いてちょうと読ますあたり、句者は一世であろう。相当の年配の人であることが推察される。兼題の題も墨で太く書いて、故国を偲んでいる様子が目に見えるようだ。アメリカの句会へ飛行機で出席することも夢ではなさそうである。

◇

（5頁よりつづく）

はないのである。関西ことばで、ふっくらと作句したら川柳の味もよくなるのではないか。

大谷崎が関西へ移住してから、関西語で作品を書いているが、卍（まんじ）を書いたときは、東京語でいったん書き上げてから、関西の人に直してもらったという話をきくし、「細雪」（ささめゆき）の、いわゆる芦屋夫人のことばの、関東、関西ちゃんぽんの用語にも苦心したそうである。

上方といっても京都やその近くはもちろん別で、ぼくの昔のカノジョは江州近江八幡だったので、その江州コトバと大阪のことばとの区別がよくつかず嗤われたものである。

こんどモデル問題を起した「鴨東綺譚」（大谷崎作・週刊新潮所載）の奈々子の本家は江州商人だから、京都ことばに近いのである。おかしな話だが、奈々子のモデルといわれる人が、ぼくの昔のカノジョの本家と同姓なのである。

一路集

肩

山根白星選

肩を持つ訳ではないとかばっとり　藤波トン坊
幸福はこゝにも肩を揉んで呉れ　実男
双肩に担われている不倖せ　英断
蝙蝠のように両手を肩にかけ　同
肩揉ませながらポツ〳〵お説教　豊年
肩上げの取れぬうちからチヤチヤチヤ　立児
片方の肩を落して金のこと　凡九郎
肩に手をかけて明治に叱られる　同
肩に手を置いて信頼さすつもり　十九平
肩叩く駄賃を孫が値上げする　同
豆腐屋は喇叭を吹いて肩を替え　幸児
ヒロインの肩が寂しく母映画　知恵美
肩書きを昔のまゝで押し通し　恵二郎
君達の双肩などとおだてられ　むじな
呑んでから意気投合の肩を組み　三六
肩一つ叩かれたので賛成し　光郎
ボディビル頼みもせぬに肩を見せ　同
友情の肩に置かれた掌の温み　夜潮
へべれけが肩でどうやら舵を取り　有子
後添えの連れ子は肩をすぼめてい　実信
肩と肩寄せて話が甘くなり　明林
叱られる予感へ肩を叩きまゝよ　葉光
うしろから智恵かしてやる肩叩く　同
肩貸して呉れる彼女の真険さ　恒雄
満々の闘志は肩が吊り上り　雄々
肩のよいとこもスカウト見逃がさず　同
闇米をかついだ肩にあるキャノン　正郎
肩叩き社長は含み笑いする　同
肩透し喰って人生判りかけ　雄声
肩ゆすぶってボス相こうを崩したり　多久志
肩書きの手前キャシュで払うこと　同
肩書きが出来て日曜家に居ず　貴美
肩に手を置いて話が合い始め　水堂
孝行の真似をする気の肩を揉み　一也
肩書の手前しんどい寄附もする　同
春日遅々姑の肩をもんで無事　庵
両耳をハンドルにする肩車　亀
肩を揉む時だけ姑目を細め　同
言訳けへ悪友だから肩を持ち　万古
盛装は肩から先に疲れが出　同
肩こっただけだと三本立ての愚痴　とも子
父ちゃんの肩もみ出来て貯金箱　与根一
肩の線女形の芸の見せどころ　同
肩に手を置かれてどっと哭けてくる　同
肩車して売店をさけて行き　文平
感謝状受けて肩書き一つ減り　同
肩越しに愛の言葉を女聞く　屋気楼
さしかける傘さしかける肩も濡れ　白猫児
口下手の正義を主張してる肩　同
青春の肩はカメラのかけどころ　同
父の肩小さい野心が叩きに来　可十
祖父だけは女房の肩を持ってくれ　堯二
誘ったは肩をすくめた方と知り　礼司
撫で肩の嬌姿も南地に出てた人　見勢
激励の言葉を肩へ叩き込み　万古人
御無心へ御鄭重なる肩すかし　不二
肩を張る気力も失せた資金繰り　高志
(佳)すく〳〵と肩身の狭い子が育ち　一休
(佳)お仕事をせぬ奥様も肩がこり　微酔
(佳)金策に出る肩巾をいつくしみ　不二
(佳)肩に着てモデル疲れを喫いつける　可十
(佳)肩にくる重さに馴れた社宅の灯　恵二郎
(佳)ペンだこのある頃肩はこらざりき　千容
(人)泣かれてる肩へ思案の煙草の輪　英断
(地)肩の荷を下ろしたころに迎えが来　どんたく
(天)少年の肩怒らせている正義　葉光
(軸)盛り場を行くマドロスの肩の巾　
肩を揉む孝行ぐらいボクも出来

洗濯機

森下愛論選

洗濯機欲しいプランへ又生れ　明林
新世帯リズムに乗った洗濯機　実信
する事の多い公休洗濯機　秀三
洗濯機まだ縁遠い共稼ぎ　二郎
洗濯機無駄にはしない本を読み　有子
洗濯機便利で困る恐妻家　万古
掌の荒れを見せて洗濯機をねだり　トン坊
洗い物順番がある洗濯機　天邪鬼
ヒステリをつのらせ隣の洗濯機　十梧
百円で当るのを待つ洗濯機　牧人
洗濯機買えば当った洗濯機　越山
ボーナスで結局買わぬ洗濯機　幸児
朝寝する枕に響く洗濯機　葉光
洗濯機お流になる内輪もめ　恵美
洗濯機買うても矢張り無駄話　英断
空は晴れても動かぬ洗濯機　白葩
共稼洗濯機代七分三　定月
交際費減らされ妻の洗濯機　恒雄
洗濯機隣で買った夜はもめ　立児
洗濯機妻カタログで通になり　十九平
噴流がこう攪拌がどうまだ買わず　凡九郎
オムツオムツオムツ洗濯機食傷し　文平
嫁はんが母に手ほどく洗濯機　秀敏
切りつめてつめて月賦の洗濯機　多久志
洗濯機買ったばかりにノイローゼ　雪峰
桁一つ女が惜しむ洗濯機　礼司
姑は嫁の洗濯機だけを褒め　三六
洗濯機やっぱり雨の日は休み　満秋
洗濯機覗いて鯛を裏返し　代仕男
寝こまれた損々無理した洗濯機　五茶
停電で色を出してる洗濯機　黄蛾
洗濯機買っても矢張り暇がない　峰豊
洗濯機買おうか女房貰おか　むじな
買う前の口論秘めた洗濯機　徳泉
置く場所を決めて買えない洗濯機　光郎
洗濯機持たねば嫁にいけぬよう　源一
空箱でもしやと思う洗濯機　正郎
ハンカチが二枚洗濯機が廻り　芳仙
洗濯機買う相談渉らず　三思楼
洗濯機買う内職を妻はじめ　晃康
奥様の顔がつめたい洗濯機　竜山坊
洗濯機干すのに困る程洗い　圭水
洗濯機来たなと隣りの目が光り　とも子
洗濯機買えと女中迄が云い　同
看護婦の非番忙しい洗濯機　可十
洗濯機牛舎の横で泡を立て　博遊
見るだけは妻と見て来た洗濯機　与根一
洗濯機労働過重を訴える　雄声
(人)へとくりのピッチあげさす洗濯機　恵二郎
(地)洗濯機女中へ別な用がふえ　不二
(天)洗濯機妻ほしがらず腕太し　雄々
(軸)寝巻だけ洗う二号の洗濯機

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社三月句會（大阪市）

三月七日　於　光明寺

毎月七日を、句會開催の定例日と定められた。三月本社句会も、相変らぬ盛況振である。開会に次いで、本日の白柳子氏の句評は、表現の豊かな真実味のこもった句について、本誌三月号の中より草一郎、白香、花村、摩天郎、恵二郎、春日、ひか平、梅志等の諸氏の句を引例し、短評を加え、路郎師の本夕の柳話は、自由律川柳と定型川柳を比較され、特異な作家でない限りは詩的情調なリズミカルな定型律川柳を、作句すべきであると説かれ、後ちわが「川柳雑誌」の編集に、右書をする所以を述べられ、待望の席、兼題の披講に、名句、佳吟に、耳を傾けた。本日の不朽洞賞優勝カップは里田一ン十氏獲得された。閉会正に午後九時

出席者＝路郎・須賀太・飄太・雅堂・与呂志・いさむ・一三夫・生々庵・進之助・古方・茶仏・武助・太路・鳥荘・静馬・ひろし・立児・梅志・賀峰・昌子・秀夫・言也・三司・黄蛾・喜仙・淡舟・竹荘・歴気楼・文秋・六竜子・水堂・井平・狂二・凡九郎・多久志・省三・一乃字・天真・博遊・沐天・小松園・毅・水茶・一飄・文蝶・南風郎・利武・好郎・雅巣・十悟・潮花・恒明・白水・愛論・みのる・峰春・幸男・白柳子・花村・凉一・摩天郎・没食子・香林・竜太郎・葭乃

（摩）

兼題「雑沓」　麻生路郎選

雑沓に来るとあんちやんらしうなり　賀峰
雑沓をよそにお堀の水すまし　いさむ
雑沓にまぎれ万引ほっとする　恒明
雑沓の中でヒントがみつかった　古方
雑沓に横町ばかり歩いて来　阿茶
雑沓へ白衣は度胸のいい構え　生々庵
雑沓へネオンぐろくろる無表情　凉一
雑沓へ雪はあわれな肌を見せ　水茶
老妻をかばい雑沓切り抜ける　淡舟
雑沓の花見ほこりの鮨を食べ　たつよ
雑沓の中へ巡査もまきこまれ　竹荘
雑沓を一寸はずれていた「覗き」　古方
雑沓をよい事にして手をつなぎ　阿茶
雑沓へ露店は邪魔なものにされ　太路
国電のラッシュ手荒い客になり　梅志
肩ふれてふれて心斉橋の宵　須賀太
雨上りまた雑沓が続くなり　いさむ
雑沓に来ると酔うてもしやんと立ち　賀峰
雑沓の中に白衣をふと忘れ　一乃字
雑沓へスリは魚の様に逃げ　水茶
雑沓へ持たぬ強味のふところ手　水堂
雑沓を家出ボカンとしてみとれ　茶仏
雑沓になって土産やもう売れず　好郎
雑沓へ子供の帽子持ったまゝ　須賀太
雑沓を出て肩掛にふと気づき　潮花
雑沓の中の釜めし足があり　進之助
雑沓へもう外人を振り向かず　一三夫
雑沓におびえる母の肩を抱き　一ン十
雑沓にここだけ右を歩かされ　路郎
雑沓で出つけぬ母を迷子にし　同

兼題「国産」　戸田古方選

国産の真珠を肌はまだ知らず　飄太
国産の絹を着せずに娘を育て　一ン十
主婦として国産品の味をみせ　愛論
奨励の影で国産こけ下ろし　狂二
国産品修理の点で行き届き　雅巣
国産もこれだけ揃う見本市　博遊
ズボンの膝伸び国産を疑わず　一飄
国産のしこたま特許料を出し　一ン十
容器まで似せて国産出来上り　水茶
とっくりと見れば国産らしい文字　太路
舶来には負けませんとはまだ弱し　好郎
国産を嫌う極度の近視眼　三司
国産の香り鮭鱒丸う開け　梅志
国産を買へと大臣からの声　摩天郎
国産が結局俺の性に合い　雅巣
国産のドックへ響く鎚の音　進之助
国産がイミテーションでない誇り　生々庵
国産で設計通り出来上り　言也
国産も良いなと肩を叩かれる　文蝶
国産で良いのがあると女云い　閑羊

兼題「宿直」　富岡淡舟選

宿直を引受け過ぎて疑われ　太路
宿直のうどん一ぱいことづかり　文蝶
宿直の無聊へ電話粋な声　太路
急患がつづき宿直寝も出来ず　竹荘
宿直の床で強盗の記事を読み　白水
宿直へチャルメラの音の淋しうす　与呂志
宿直の朝ふんだんに湯を使い　三司
宿直の自分の影に立ち止まり　文蝶
宿直の夫へおやすみ電話でし　与呂志
小使のロマンスほじる宿直日　須賀太
宿直に児の容態が気にかゝり　言也
薬まで持って宿直無事に終え　いさむ
宿直の恋に花まで活けて去に　たつよ
遊びすぎ宿直室へころげこみ　阿茶
宿直が初発の音に起される　一乃字
長旅をした様に宿直帰って来　利武
本宅の宿直でやゝ認められ　水茶
宿直の一人が酒のカンをする　愛論
逢いに行く夜宿直と云うて出る　竹荘
ラジオ寄席すんで宿直寝ると決め　三司
宿直の火鉢何やら焦げつかせ　潮花
宿直へ不気味に金庫光って居　文秋
宿直の朝女房はすねてみせ　昌子
みをつくし開いて宿直碁をはじめ　ひろし
酒粕を焼いて宿直少し酔い　十悟
宿直も交ってそろばんまだ合わず　愛論
宿直が続きますなと妻皮肉　太路
宿直を妻は電話でたしかめる　天真
宿直は社長の椅子で欠伸する　雅巣
一合の酒宿直をほろりさせ　賀峰
おしずかに宿直鼻毛むしりとり　十悟
宿直を起す電話は酔うている　茶仏
事故なしと書いて宿直ホッとする　南風郎
宿直の鍵は枕の下へ入れ　小松園
風きつう吹いて宿直子を案じ　淡舟

席題「天引」　長谷川三司選

胸算と天引いつも喰い違い　茶仏
天引をされた賞与の軽いこと　静馬

天引へ溜息の出る札を持ち　利武
売上げの一割子のため天引し　白水
天引の額が師走の身にこたえ　言也
天引の税も納めず社がつぶれ　雅堂
天引をしておまっせとしてやられ　茶仏
市役所に勤め税金天引かれ　淡舟
天引でためて気軽い湯につかり　鳥荘
飲み料を天引き妻へ渡すなり　淡舟
天引はつらいが借らずに済まぬ金　井平
天引の貯金妻にも夢があり　立児
主婦として天引をする俸給日　愛論
天引にしといて約手書いて呉れ　小松園
天引に淋しく残る札を読み　言也
天引の給料袋に妻の愚痴　狂二
天引の方は税吏に似た仕打ち　茶仏
月給日妻天引が気に入らず　文蝶
天引の言訳話があとや先き　一三夫
厚かましい天引すると知らんだ　白柳子
天引の中で幅とる税の額　太路
借りていながら天引へムッとなり　潮花
いかんともしがたし税金天引かれ　みのる
給料から送別会費天引かれ　淡舟
天引のおかげで貯金出来ました　竹荘
天引の中の不審を妻見付け　太路
天引で二一てんさくの五が残り　天真
闘争の結局天引額が増え　省三
天引で貯める心算の台所利　武
天引きやからと一応だましとき　省三
へそくりも天引されてることは知らず　同
天引で三年かゝる費い込み　多久志
知らぬ人の香典までも天引かれ　省三
前借はあるが天引とは淋し　潮花
月給にふれず天引せよとだけ　恒明
天引と決って異議のない処分　一乃字
天引きを社長は別な金で出し　茶仏

席題「入学」　小川恒明選

ランドセル入学の日が待ち切れず　六竜子
入学日もう付添いを邪魔にする　沐天
入学へ頼母子一つ落すなり　淡舟
今日からは角帽となる子の背丈　言也
入学日父のカメラへ立たされる　同
入学にこゝは便所と教えとき　摩天郎
てれくさいやうに入学した補欠　十悟
夢のある子の入学に世話がやけ　賀峰
入学へ大手を振ってみたい朝　十悟
入学のうれしさ日記に書き切れず　白水
なんやかとマゝがうるさい入学日　みのる
入学日帽子ぬいだりかぶったり　同
入学の日からおしっこちびって来　十悟
入学は近しいろはは書ける　雅巣
御入学おめでとう私の店も御ひいきに　凡九郎
憎い程空澄み切って入学日　涼一
入学の裏を本気で尋ねられ　文秋
ぼっちゃんの入学自家用横付ける　恒明

席題「マダム」　水谷竹荘選

商才に丈けて抜目のないマダム　言也
眉引いてマダム若さを失わず　同
旦那来る日なりマダムの厚化粧　多久志
常連にマダム酌をして廻り　黄蛾
税吏来るたびにマダムが変って　須賀太
マダムになっても二号の悩み抜け切れず　南風郎
芸術も解る人気のあるマダム　言也
店仕舞マダムの恋が元らしい　水茶
資金難マダム素顔で逢いに来る　南風郎
集金はマダム自づからかけ廻り　天真
算盤を入れるマダムになって老け　茶仏
マダムからの言付耳の傍でする　小松園
一応はマダムにきいてと女逃げ　みのる
鋭どさをチラリと見せてマダム消え　白柳子
勘定になるとマダムは酔うふらゝ　十悟
つけ馬へマダムしっかと念を押し　いさむ
不渡りと知らずマダムは送り出し　ひろし
仲人の様にマダムは気を使い　鳥荘
マダムだけ解って貰えるクダを巻き　武助
御想像に委せますわとマダム立ち　立児
マダムまだ短歌を愛す夢があり　同
儲かってマダムパトロンが邪魔になり　愛論
パトロンが変ってマダム若返り　水堂
私服着た巡査へマダム愛想よし　いさむ
パトロンが変ってからのマダム派手　恒明
桁違いの悩みをもっていたマダム　古方
小娘になってマダムの清い恋　雅堂
マダム今日和服で気分変えてみる　立児
何人かパトロン変えてマダムなり　一三夫
なびきそうでなかゝしんのあるマダム　多久志
是からの梯子マダムに意見され　省三
男にもあいたマダムの酒の酔　利武
あの人が来るまでマダム店に居る　黄蛾
きちゝとマダムとなって取り立てる　一瓢
休業の札でマダムは恋をする　雅堂
女給みなマダムの恋を知っている　竹荘

雑川　淀川支部句会（大阪市）

武部香林選

出来た子の始末は親へ持って行き　礼司
ロボットの同僚先に役がつき　文児
ロボットになって養子は気に入られ　若葉
会長はロボットでよいボスを据え　多久志
ロボットも停年近く役がつき　曲蝶
ロボットでよし停年を過ぎる身の　香林
ロボットに時節来るまでたっておき　水堂
恩給と心中をする未亡人　東洋男
卒業の感傷もなく職さがし　花村

雑川　阿倍野支部句会（大阪市）

菊沢小松園選

店頭に四季を走らせ果物屋　十悟
内らから見る店頭の頼りなく　太路
店頭で売り残さない声を出し　文秋
途中から読み出し始めまた戻り　秀夫
飲みに行く途中で金を数えて見　豆秋
途中から抜けて何時もの所で逢い　梅里
酒好きの親へ途中の気が滅入り　梅志
二号だとの噂の中でシャツを干し　徳三
いつからかシャツを着て寝る齢にな　博也
惜しいシャツ小さくなって子に譲り　喜仙
つぎのあるシャツを一番下に着せ　賀峰
丸首のシャツに若さが満ち溢れ　葉光
ひきしめる踊り踵の音になり　凡九郎
一枚のハガキで済ますエチケット　白柳子
金にのみ執着のあるエチケット　春柳
エチケットとやらで帽子は着たまんま　小松園

雑川　堺支部句報

八木摩天郎選

出来心にしては度胸がすはって居　南風郎
札びらへついふら〳〵と出来心　狂二
剣豪の末路はしかと知れぬまゝ　雪山
剣豪と知らずたかったごまの蠅　左久良
遺産から二号のあったことがばれ　雄声
後釜に座って遺産とるつもり　南宗
大学を卒業させる気の遺産　万楽
遺産等無くて良かった笑い声　武助

遺産分け風のたよりに聞く二号　好郎
遺産ある為めに税務署うるさ過ぎ　摩天郎

雑川　**下関支部句会**（下関市）

石川侃流洞選

お見合の正座の二人だまってい　茂美
子をやって母踏切を折り返えし　九呂平
後姿母になる日の巾をもち　みつる
舞扇後姿へ幕があき　成理智
秀才の子の細首が案じられ　蘇人
弁当のぬくみを抱いて出る吹雪　藤四郎
節分の豆をキナ粉にして夫婦　司楼
あれでまだいゝとこあって戯にせず　久仁男
踏切が大事と妻に意見され　吐泉
後姿は塩まかれてるとも知らず　柳蛙
汽笛何か悪魔めいてる猛吹雪　柳塵
生き字引少し理屈が多すぎる　千里
あの頃で嫁がぬはなにかある証拠　鶴平
有難い融資へ紐がついている　十字星
正座した相手に借金いいそびれ　呑喜坊
気兼ねして豆を撒いてる二階借り　ほたみ
あきらめを後姿へ捨てきれず　茂美
叱っては出したが吹雪案じられ　一規
登校の生徒へ踏切手を上げて　花子
踏切は石の地蔵に護られて　遠夫
大漁旗吹雪をついて帰って来　伊三男
遮断機を降して残りの茶をすす　良坊
養子口金のある方五頭身　柳成
あご紐を直して吹雪の中へ出る　侃流洞

雑川　**大聖寺支部句会**（石川県）

野村味平選

合格が試験の苦労忘れさせ　武富
早春の宵村の常会みな眠り　俊夫
注射でもやりますかと先生云い　昌男
リンゲルの吸収へ一縷の望みかけ　とよ
お気毒注射をしても間に合わず　桃園
注射の跡数えて淋し病み上り　久雄
たしかに注射が効いた子の寝息　味平
下り蜘蛛見つめて空想限りなし　光郎
空想は破れ戦犯には問われ　恒雄
空想が切れてポッンとニキビ押し　酔羊

雑川　**倉敷支部句会**（倉敷市）

田垣方大選

冬の垢残して置いて雪が解け　万古
雪解けへ続け続けと宣伝社　春日
争いも金を持ってる方が勝ち　春也
閑人がつづく人出に僕も居り　五茶
きもちくば援助の金を返せと云い　一念
気味悪い妻の笑顔に迎えられ　一善
乱暴に出る玄関へのこる悔　千容
陳列の衣裳へあなたねえあなた　方大
年頃は桜のせいにして出かけ　越鳥
ウインドへ飾って頂戴嫁き遅れ　不二郎
素敵ねと言った心でけなしていい　十九一
ふところ手将棋へけちをつけにくる　亀庵
争いの元ポケットの花名刺　麗水
店員が来たので陳列から離れ　千代春
お高くて素適な人にゆき合わず　清子
未練げな顔陳列へ遠ざかり　まり子
叱ってはみたが年頃気にかゝり　明心
雪解けへ母の顔見て遊んどり　銀子
閑人の父で叱言ばかり言い　耕水
御近所の口が尖っている援助　承平
年頃へ仲人らしい眼が光り　鼓草
争いの後でかけらを継いでみる　三六
名のらずに帰った援助ふし拝み　笑雷
襟足の白さへ援助がある噂　流風
年頃へ親が一目おいており　鯉風
実力のあるのは争うのを嫌い　素身郎
留置場素敵な美人を連れて来た　斜木
春のどか机に這わす蝸牛　天風
援助する心を誤解されたまゝ　可笑
観光と別に素敵な海女の尻　万坊
年頃のすることみんな危ながり　平々
雪解けへ妻が落した財布が出　実穂
昨年のゴミそのまゝで雪が解け　狂風
焼香の順を争うほど残し　飴ン坊
決意だけほめて援助はしてくれや　聴牌
ぎ受けた援助に今宵も帯を解き　勝通
お隣も年頃の娘をもて余し　広志
街へ行って戻りて妻の眼が疲れ　晴雲
結局はやさしい母が勝ちました　真奇
年頃を持って年頃目に映り　隆文
扶助料の穴を援助で埋める恋　凡一路
給料だけを笑顔で迎えられ　一平
年頃が日誌をかくすようになり　桃仙坊
年頃へ顔の権利が崩れかけ　善坊
笑顔には借金取りも負けてにげ　宗歩

（三月十一日　於　倉敷南中学校）

雑川　**篠山支部句会**（兵庫県）

小西無鬼選

大切な懸崖の枝孫が折り　柳常
折紙の星がきらめく童話劇　洋牛
早六時慌てゝママが薪を折る　一平
手を折った子が白衣の箱に十円入れ　けん坊
小説を拾いよみして発車待つ　登月
仕送りの父にすまない本を読み　偶倍
小説のようなせりふで夜のランデブー　初穂
小説を又読んでるか生返事　英断
小説に泣いて一人の昼となり　肇花
うつうつと孫に小説読ませつゝ　枝葉
のっけから小説に似た恋であり　文平
老眼へもう小説も肩がこり　ひか平
歯科医者を鯉の口してにらみあげ　小菊
阿呆口の一つも云って良い歯科医　比斗良
おもちゃは口歯科医飲むような口を開け　一風
荒っぽい歯科医だれど女医でもて　鈴江
年頃のルージュ歯科医の指につき　白猫児
ビルの窓歯科医もあって都市の窓　無聖
歯科医もう虚栄の義歯と見抜いたり　無鬼
垢抜けのした娘で母に気をもまし　越山
ネクタイも垢ぬけしてひやかされ　吾作

酔う程に垢抜けのした節廻し　暁城
垢ぬけがしてると見たら三味を弾き　左文字
痛いのに歯科医平気で待たしさき　文子
あゝ遂に折れて農家へ嫁くと決め　一雨
又貸しをするなと小説かしてやり　梅枝
掃除する妻に小説追われて居　村雨
小説は貸し下されで消えて行き　初音
無雑作に掴んだ籤は一等賞　実世
無雑作に見えてもびんとくる男　千草
無雑作が超然と見える酒の席　愉多可

雑川　**米子支部句会**（米子市）

三鴨美笑報

流行を追う奥さんの背が足らず　雄々
旅なれぬ母に切符のしまいどこ　水鏡
流行のモードが派手な事故現場　紅帆
駅長を夢に見ている切符切り　天邪鬼
速達でまで出したのが没となり　白堂
口惜しさが相談欄に持ち出され　久城
湯の町へ切符の二人夢心地　素瓢
青雲の意気が切符を握りしめ　庄太
個性美を消しても着たいパリモード　素生
今そこに置いた魚を猫がとり　詩郎
速達に金の無心で親泣かせ　すみ子
流行の八頭身にゆきづまり　吾柳
流行のアロウラインで老けており　愚球
速達が用をたさない三日留守　菅泉
団体の切符団体の声で乗り　新雪
赤い爪切符の駅は基地の街　瓢太
速達が来て日程を慌てさせ　美笑
切符いじり身の上話まだ続く　康女
流行を追う眼にモデル囲まれる　節枝
流行が大いに家計ひびかせる　尚子
流行も一日おくれて来る田舎　定男
改札に夫婦連れではない二人　明芳

雑川　**備前支部**（岡山県）

浜田久米雄選

どん底におちて悟りの境を知り　柳風子
奥の手のふて寝で女抗議する　圭女
金になる名士の書いた置土産　三晃
母さんの目くばせをさけ子はねだり　娯句楽
設計図ここは水道据る位置　伊久野
置土産官舎の備品の様になり　三六
借金を置土産して先立たれ　秋月
本当にいゝ人だった置土産　浄美
目くばせを受け恐妻の顔になり　久米雄
置土産母の帰りがまちきれず　操子
二人切りなのに目くばせして別れ　苑女
もうなにもいうなと友の目に出合い　正州

雑川　**ハワイ支部句会**（ハワイ）

築山快夢起選

評判の程でなかった旦那芸　迷朗
評判程貯めては居らぬ老夫婦　銀水
十代の美貌評判危ぶまれ　笑有
評判の映画も見ずに稼ぎ貯め　快夢起
評判へ妻のさぐりの眼がこわい　草一郎
評判の味連綿と三世紀　暁舟
新宗教評判ほどの種子蒔かず　潤之助
若干は割引き評判聞いておき　馬喜々
嫁にゆき評判娘の噂消え　東田楼
評判の神につられてまた迷い　拝山
評判になつて夫は気が疲れ　芳雨
評判の家柄押してまとまらず　周防
評判は二人を結ぶ神だった　閻魔王
信念は世評の外に生きて居る　細民
年甲斐もなく評判に釣込まれ　柳葉
評判を聞流す程腹が出来　旋風
肘鉄を喰わし評判ぱっと立ち　紀南児
評判の娘を嫉妬の眼が囲む　虹橋
評判の佳人案外幸に洩れ　エス子
評判は二派に分れて若い後家　伯楽
アプレ型評判などは気にもせず　麝花麗

雑川　**高知支部句会**（高知市）

大西迷窓選

浮気する旦那きれいな嘘もつき　そよ子
浮気みな女房の故にしてしまい　蚊市
惚れ合って添ったに浮気もう始め　竹比呂
世間では只の浮気とされている　きみえ
風邪引いたわけは二号が知っており　正哲
浮気など出来ますものか養子です　康之介
浮気して帰れば家計簿つけており　玲羊
皇太子「たたき」の土佐をなつかしみ　耕生
さゝやかに名物売って夫婦老い　良夫
名物へ添えたえくぼの国訛り　俊一郎
民主化へ先ず父さんは床を上げ　左千子
妻拗ねて茶漬で走る朝の駅　茶茶茶
出勤のバスの間際の朝の唄　寛
今朝も亦静かに眺める雲の色　己
朝帰えり問答無用で妻は里　勝亀
ゲレンデが瞼に浮ぶ雪の朝　素出有
終電に遅れて駅の朝を知り　万坊
ひよこ今朝始めて妙な声で鳴き　舟帆
三度目のあたへしぶり〳〵起き　梅林
泥酔へ朝にしましよう妻優しみ　舟
今朝も亦何時もの駅で会つたが　英太郎
名物を詩や歌にしてつゞく旅　蘇水
寛容はもうこれまでという浮気　迷窓

雑川　**松江支部句会**（松江市）

勝谷山川児選

捨犬の様に落第させられる　稔
落第で売れて陽鉾気にならず　幸二
落第をした子の背が伸びすぎる　与根一
落第をしたとは見えず美貌なり　一兆
近眼の婦人会長よく弁じ　康男
近眼の鼻の丸さがよく似合い　山川児
近眼政治失言ばかりつゞくなる　天痴人
失言追究十二才の智恵であり　孤呂二

季節一品料理
江戸前にぎりずし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店　大萬
☆大万川柳（第六十三回）を募る
兼題「夫婦」　路郎先生選
締切・五月十五日　句数五句以内
発表・五月二十一日（店内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

失言の訂正をして失言し　乱雪
失言を大阪弁がまくしたて　三雷波
失言へ味方が出来て面白し　冬生
宍道湖へなげる日蝕の水鏡　祥月
女客女房に悪い智恵をつけ　可明

みをつくし川柳会（大阪市）

戸田古方選

白扇のいっそ白いまゝがよし　古方
膝一つ打って扇子は槍となる　無人
入学へ子は一向に無頓着　花香
無頓着になりたし芝生に寝ころんで　正斗
無駄話ひにくも入れて腹を読み　義宏
表より確かな裏口へ廻り　歌
無頓着一番世情にたけていた　斗牛
無駄話相手かまわずシャベリ立て　せつ子
あほらしい私にすきな人なんて　とし坊
知った顔時間つぶしの無駄話　公子
あれでマア勤っている無頓着　のぼる
あほらしいフト気がついてうす笑い　喜峰
アベックの筈に思わぬ瘤がつき　中西
そこをまあマア／／／と酒酌がれ　凡九郎

大阪通信病院川柳会

麻生路郎選

看病の上手な妻はもと婦長　竹荘
唖まねをして看病は座を立たせ　愛論
局長の看病秘書はつきっきり　幸男
看病の欲目は医者を信じかね　没食子
チャルメラが聞こえ看病眠うなり　春巣
アルサロで脊のびした様な恋を見る　春雄
アルサロのオカッパの娘にだまされる　桃村
内気さがいっも見合をしくじらし　みのる
内気な子野球のまりだけ拾わされ　史葉
誘惑へ内気が蕊の強さ見せ　夏生
内気な娘趣味も古風なことに凝り　水楓
初恋も内気が故に出し抜かれ　よしを
気の合った内気同志も亦楽し　方正
学芸会台詞忘れた内気の子　草右
高校生の自殺内気と書いてあり　ハナ子
内気だが好きと言うたは手紙だけ　峰春
内気とは思えぬ様な安来節　幸男
内気な娘酒はのめない顔をする　路郎

おたまじやくし句会（天理市）

丸尾潮花選

クイズ趣味投書代にもならぬなり　福陸寿
読書する趣味でやたらに読みちらし　白蓮
趣味でしたのに喰うための芸になり　花鶴美
釣るだけが趣味の子供でより喰べず　糸潮
趣味の域出てる社長の筆の冴え　奈良子
ダイヤルは親子の趣味で廻される　梅林
カメラブームヌードをねらう趣味があり　凡平
いゝ趣味と言われ一銭にもならず　満秋
千代紙の趣味へ鋏をまだ置かず　潮花

城東村青年団川柳倶楽部

兵庫県出口白猫児報

待っていた客と祭が共に来る　正一
来客は花婿殿であわて出し　宗兵衛
長居する客にホウキを立てたるか　夢舟
やぶ入りに帰ったわが子客さかい　康月
炬燵でも足でけんかの子沢山　功
大臣のメンツでもめている予算　白猫児
繃帯の足へひいきが頭痛やみ　齊花
買収をされた帰りの足となり　白猫児
ボックスの砂かきならす足のくせ　一柳
出稼の土産小さな手をこぼれ　齊花

3・3・3川柳会（堺市）

川村好郎選

箸をおき幹事算盤おかされる　一楽
雛祭こゝにも娘を持つ苦労　高志
床の間の色紙我が家の雛祭　貴山
街燈の灯で請求書を読み直し　夕霧
老人の日だけ長生き認められ　冗歩
孫見ればひまごが見たい気になり　好郎
内気者前をチャンスが通りすぎ　南宗
そのうちにチャンスが来ると左遷され　圭水
モーニングこれが常着や公益社　狂二
常着にも旦那の好みがいる暮し　雪山
これ常着ですとファンを羨ませ　雄声

夏が近づいてまいりました。川柳家の皆様の夏姿を涼しく美しくしたいと本社の路郎主幹が自句を揮毫され、別染にされ大変好評を博したものです。男女共通に召されることが出来、湯上りに好適です。旅に出かけられる時など、車中でも、宿でもお召しになれば、まことに趣味人らしい寛ろぎを感じさされます。又、句会の余興などに揃えの川柳浴衣で踊られるのも夏の会らしくていいと思います。

趣味の川柳浴衣を

頒価
八五〇円・送料六〇円
御送金は社の振替を御利用下さい。

川柳雑誌社サービス部

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社 大坂商店
大阪市天王寺区堺一丁目三番地
電話東(94)1745・5463番

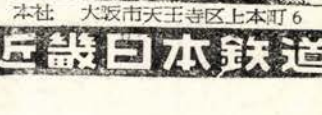
公・私・雑・記

★桜も散って、もう金魚の売声がする。スッカリ初夏の感じである。★ことしはゆっくり桜を眺めるひまがなかった。それでも、四月八日には、川雑婦人友の会主催の観桜川柳句会で、デッカンショの街篠山へ出かけた。雨のため一寸遅れて五分咲というところ、しかし花の雨もなか〳〵風情があった。作句に歓談に会はさかんだった。篠山側の柳人のささやま踊りも見せてもらい、富士子さんの指導で大阪側も踊ってうれしい一日だった。★五月には既報のように山陰川柳大会が十三日の午前十時から鳥取で催される。大阪からもかなり出かけることになっている。私たちは前日に出て三朝泊りの予定である。出来るだけ多数の柳人と行を共にしたい。★疎開している頃、伊賀の上野の古本屋で買った「英語基本文型」という小さな本が出て来た。その本のカバーにも、トビラにも、いっぱいらくがきがしてある。何かを思った時、紙ぎれがないと、その辺持っている本に、それをかきつけるのが僕のくせである。従って、句が幾つか書いてある時もあるし、何かの計算をした数字である場合もある。この小さな本には香林、緑雨、一笑、吐空君等の句がかきつけてある。どっかでの柳話の材料であったのかも知れない。それから「どんな天才でも、川柳を作らねば川柳はうまくならない。要は練習が第一だ」というようなことがこま〳〵といっぱい書いてある。それから英文が七八行書いてある。喰べるものがないのでみんなが鵜の目鷹の目で食料品を探がしていろころだったが、ひもじさを訴えた語は何処にも見当らない。「僕にタバコを一」と書いた下に、「路生、乱耽、跳二、あをやぎ、生々庵、香林、白面人、貴志子、辰子、千舟、山川児、巣人、八歩、岳仙、無一、北海、竹荘、没食子」という名が列記されている。後人がこのらく書を見たら、僕にタバコだけでは意味が通じないが、これはタバコをいただいた人たちに対する感謝の意をこの小さな本に書き遺したのである。路生君は後に阪大の名誉教授になられた笠原道夫医博のことで、僕同様にタバコ好きで食後のタバコには何をと云った風に、一日に幾種類かのタバコを喫っていられた。僕はよく葉巻をもらったものである。後、戦渦で家を焼かれ逆瀬川の仮寓で亡くなられた。乱耽君は今の住田藍亘で、その頃魚崎に住んで運搬業とタバコ屋を兼業にしていたように思う。跳二君は立川ペン先の社長で、単にタバコだけではなく、疎開についても疎開中も陰分厄介をかけた。あをやぎ君は千石荘に入院していたが宅は大阪でタバコ屋をしていた。戦時中に九州で亡くなった。生々庵、香林、白面人の諸君は今も不朽洞会員で健在である。貴志子さんは米本儀之助氏夫人で高師浜の家を進駐軍に接収されてから仮寓で亡くなられた。八木辰子さんは上野市に住んでいられた花柳吟のうまい作家であった。津田千舟君は今でも千石荘の外気浴病生活を続けていて、「近作柳樽」での古参株だ。勝谷山川兄君は松[illegible]木の市役所に勤務、最近不朽洞会員復活して川雑松江支部の支部長をしている。巣人君は松江に在住していろが消息は絶えている。大西八歩君は古い不朽洞会員で鳥取市に在住。岳仙君は玄洞子とも云ったが近ごろは顔を見せられない。巽無一君は千石荘に入院していたが、退院後、千石荘病院に勤務しているうちに岸和田市で亡くなった。前山北海君は目下在東京都である。最近[illegible]島市の川柳会に出席して、高沢一浪君に会ったという通信に接した。水谷竹荘君、市場没食子君は共に不朽洞会員として健在である。この頃は一ケのタバコ、一本のタバコもありがたい時代であったことはまだ記憶に新らしい人たちが多いであろう。その後この外に多数の人たちからタバコを恵ぐまれ、今なお続けていただいている人たちもある。偶然、らく書を見て改めて感謝している★そのころから住所が判らなくなってお互いに通信が絶え、その後お互いに亡くなったのであろうと思っていた生方敏郎氏が突然来阪、電話帳を調べて判ったと言って親しく面接した。同氏が来阪されたのは昭和十一年であるから二十年振りの歓談である。氏は「文句つけて、人こそころせわがはらをきるすべ知らぬ此頃のぶし」の作者である。憲兵からいじめられた談がハズンで大阪駅へ見送った★梨里が結婚するので、三月号からの編集には携わっていなかった。それを早く発表すると、お祝いの心配をかけるので、からだが思わしくないのでと云って、秘めていたが、潮花君は編集の関係や踊を教えに来たりするので知らさない訳にいかなかった。ところが潮花君がまる秘ですがと云って婦人友の会の良子さんに洩らしたり、香林君が仲人さんとブッつかったりしてとう〳〵不朽洞会の常任理事会の方へ知れたりして、過分のお祝をあちこちからいただき感謝の言葉もない次第、去る四月十三日の吉日をトして芽出度華燭の典を挙げたので、ここにお礼を兼ねて御報告を申上げる。新郎は河内市本庄の西村英雄（近畿電気通信局大阪管理部勤務）、まだ川柳は作っていませんが、梨里同様に御交誼をお願いする。

（路）

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ…
近鉄特急
座席指定・ノンストップ
大阪—名古屋 2時間48分
大阪—宇治山田 2時間
名古屋—宇治山田 1時間40分

大阪上六発		名古屋発		宇治山田発	
7.40	15.40	8.00	16.00	8.47	16.47
8.40	17.40	9.00	18.00	9.47	18.47
11.40	19.40	12.00	20.00	12.47	20.47
13.40		14.00		14.47	



本社 大阪市天王寺区上本町6
近畿日本鉄道

内科 小児科
平尾醫院
大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎一六四三番

川柳不朽洞會

指導 麻生路郎　戸田古方

賛助 麻生路郎　西尾栞　市場没食子　池沢白翁　長谷川一徹　土井文蝶

―維持會員―

中田守雄　寺井鋭々　白川明吉　高沢一浪　中村祐吉　古川魔花麗　高安六郎　内藤草一郎　田中辰二　三輪晩翠　岩崎愛二　大坂形水　尼緑之助　水谷竹荘　福島鉄児　新川博也　黄瀬美秋　邢谷光郎　橋本幸男　近藤青柳　高崎雄声　戸田喜楽　村水堂　森文夫　千田凡童　村味平　吾郷玲人　笹野旭泉　岡田青果　新岡回天子　若本多久志　池田古心　川口秋香　高橋操子　谷野花蜂　石居高志　小原宇柳　坂手有子　土井雷山　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　野田素身郎　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　坂田東洋男　辻圭水　松岡委滄浪

桜川不水　浜田久米雄　森下愛論　菊沢小松園　太田良子　益永貞女　逸見灯竿　清水白柳子　松江梅里　小川恒明　直原七面山　山田季賛　山田鳥荘　津田麦太楼　海野比呂史　深見雅堂　松下京一楼　津秋六花　小西雄々　金井文秋　大橋游子　近藤青柳　戸田喜楽　千田凡童

友淵貴山　田中鳥十　藤原虚水　藤井春日　長尾越鳥　佐藤千代春　木口賀峰　秋山万古　竹内圭三　酒井ひか平　船曳呑張　平尾太希志　岩崎伸

洞友

鳥山一歩　宮田不二　杉谷湖山　西　いわを　水谷谷水　高橋操子　川口秋香　谷野花蜂　石居高志　小原宇柳　坂手有子　土井雷山　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　坂田東洋男　辻圭水　松岡委滄浪

井上湧三　吉田圭井堂　青木遊亜　福田丁路　八木摩天郎　岡田青果　新岡回天子　若本多久志　池田古心　川口秋香　高橋操子　谷野花蜂　石居高志　小原宇柳　坂手有子　土井雷山　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　坂田東洋男　辻圭水　松岡委滄浪

井上湧三　吉田圭井堂　青木遊亜　福田丁路　八木摩天郎　岡田青果　新岡回天子　若本多久志　池田古心　川口秋香　高橋操子　谷野花蜂　石居高志　小原宇柳　坂手有子　土井雷山　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　坂田東洋男　辻圭水　松岡委滄浪

不朽洞会員

―特別會員―

中島生々庵　丸尾潮花　北川春巣　林野甦光　阿万万的　黒木弾正　佐野白水　森本法泉子　若園横寿喜　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

奥村丹路　石井白面人　安岡珊枝郎　村上ゆづる　伊達堰子　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

戸倉普天　上田翠光　布施筑川　南捨舟　森本法泉子　若園横寿喜　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

上田春柳　河村瑞川　小池しげお　不二田一三夫　松岡委滄浪

―正會員―

橋本緑雨　麻生葭乃　前山北海　野本呑水　山口秋花　岡村牛耕　菊田いさむ　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

高鷲亜鈍　吉田水車　小林文月　大西迷窓　亀山晴峯　浜畑胡蝶　阿形一杉　真鍋一飄　清水望峰　川端鬼酔　馬場夢生　木村十悟　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

沢田四郎作　大西八歩　亀山晴峯　山根白星　阿形一杉　真鍋一飄　清水望峰　川端鬼酔　馬場夢生　木村十悟　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

東野大八　石曾根民郎　富岡淡舟　阪田良坊　松川杜的　多胡春洋　木村十悟　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

正本水客　黒川紫香　飯降白香　石川侃流洞　馬場夢生　木村十悟　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

西辻竹青　吉形苑女　永田六竜子　伊達堰子　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

長野井蛙　安岡珊枝郎　村上ゆづる　伊達堰子　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

柴谷宰二郎　白砂旋風　大鶴喜由　桑原養痴園　政田大介　若林草右　臼井三林坊　吉田斜水　山口秋花　足立春雄　岡村牛耕　菊田いさむ　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

蛭子省二　藤本満年　吉田斜水　若林草右　臼井三林坊　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

前田伍健　三鴨美笑　小西無鬼　長谷川三司　坂井三葉　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

山路閑古　小沢史葉　大森娯句楽　中谷仙坊　野田素身郎　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

安川久留美　佐野卜占　服部十九平　岡田夜潮　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

山本雨迷　築山快夢起　国弘半休　横部牛歩　田村藤波　小原宇柳　坂手有子　土井雷山　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

川村好郎　家本富至　楢原一善　谷野花蜂　石居高志　小原宇柳　坂手有子　土井雷山　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

田村孝之介　杉谷湖山　西　いわを　水谷谷水　高橋操子　川口秋香　谷野花蜂　石居高志　小原宇柳　坂手有子　土井雷山　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

亀井花童子　西垣錦風　増田耕民　家本富至　楢原一善　谷野花蜂　石居高志　小原宇柳　坂手有子　土井雷山　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

鳥山一歩　宮田不二　杉谷湖山　西　いわを　水谷谷水　高橋操子　川口秋香　谷野花蜂　石居高志　小原宇柳　坂手有子　土井雷山　藤井明朗　永松東岸子　善木川千鳥　三村柳風子　安原斜木　勝谷山川児　小倉へとち　片山巷雨　矢吹日出雄　早川野甫　武部若菜　伊藤茶仏　吉岡草白　西出一栄　酒田清子　和田登志子　平井井平　寺本貞句朗　阿部竜太郎　西田柳宏子　稲垣正菱　辻圭水　松岡委滄浪

募集

課題吟募集

青空（廿句以内）西村梨里選
カメラ（廿句以内）新川博也選
（五月二十日締切）

奥さん（廿句以内）西尾栞選
島（廿句以内）石川侃流洞選
（六月二十日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選　北川春巣選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）
（毎月二十日締切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第十一卷　第五号
定価　五〇円（送料四円）
半ヶ年　三二四円
一ヶ年　六〇〇円
昭和三十一年四月廿五日印刷
昭和三十一年五月一日発行

（禁轉載）

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎
大阪市住吉區遠内町代西五丁目二五番地
印刷所　住吉印刷
大阪市住吉區遠内町代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話　住吉㊀六〇八一
振替口座　大阪七五〇五〇

行發日一月五年一卅和昭・本納納印日五廿月四年一卅和昭　（行發日一回一月毎）可認特便郵種三第日一月七年二卅和昭

THE SENRYU ZASSHI

NO・348

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

円四料送　圓拾五價定　誌雑柳川　號八四三第